食育に関する意識調査報告書

令和 8 年 10 月

金沢市

目 次

Ⅰ 調査の概要 …… 1

Ⅱ 調査結果の概要 …… 2

Ⅲ 調査結果の詳細 …… 3

Ⅳ 国の現状地と目標値 ……39

Ⅴ 調査票 ……40

Ⅵ 集計表 ……48

Ⅰ　調査の概要

1. 調査目的

金沢市食育推進計画(第4次)が、令和8年度が最終年度となることから、市民の食育に関する意識や実践状況等について調査を実施し、市の現状や課題を把握することで、本計画の評価並びに「金沢らしい」食育推進計画策定のための参考資料とする。

2. 調査対象者

金沢市に在住の 20 歳以上の者

3. 調査期間

令和8年6月 1 日(月)～6月 21 日(日)

4. 調査方法

20 歳以上:二次元コードが記載されたチラシを配布し、電子申請サービスより回答
65 歳以上:調査票を配布し記述式、または電子申請サービスより回答

5. 調査項目

（1） あなた自身のことについて
（2） 食育への関心について
（3） 現在の食生活について
（4） 共食の状況について
（5） 生活習慣病の予防や改善に関する実践状況について
（6） 食文化について
（7） 農林漁業体験について
（8） 環境への配慮や産地・生産者を意識することについて
（9） 食品の安全性について
（10） 今後求める取り組みについて

6. 報告書の見方

① 調査結果の比率は、その設問の回答者数を基数として、小数点以下第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位まで表示している。したがって、合計が 100%にならない場合がある。
② 複数回答形式の場合、回答比率の合計は通常 100%を超える。
③ 図表中の「N」とは、その設問への回答者数を表す。
④ 単純集計は回答状況を把握するため無回答を含め、クロス集計は回答傾向を比較するため有効回答を対象として集計した。このため、単純集計とクロス集計では N が異なる。単純集計の N は 2,877 であり、クロス集計の N は各図中に示した。

Ⅱ　調査結果の概要

本調査結果について、金沢市食育推進計画（第4次）の取り組み状況を評価するとともに、金沢市食育推進計画（第5次）の策定に向けた課題の把握及び今後の施策展開の検討を行った。

本調査結果より、食育への関心、主食・主菜・副菜を組み合わせたバランスの良い食事の実践、農林漁業体験の実施などについては、目標達成に向けて高い水準となっていた。このことから、本市でのこれまでの食育の取り組みが一定の成果を上げていることがうかがえた。

一方で、若い世代におけるバランスの良い食生活の実践や朝食摂取、生活習慣病予防を意識した食生活は十分とはいえず、若い世代を対象とした重点的な取り組みが求められる。

また、地域や家庭における伝統的な料理や作法等については、受け継いでいる者の割合は高いものの、次世代へ伝えている者の割合は限定的であった。さらに、郷土料理や伝統料理を食べる機会は若い世代ほど少ない傾向がみられたことから、食文化の継承及び伝承に向けた取り組みが課題である。

興味のある食育内容については、「健康づくりのための食生活」が多かった。さらに、今後必要な取り組みとして、体験型の学習へのニーズが高かった。

以上のことから、金沢市食育推進計画（第5次）の策定に当たっては、若い世代への重点的なアプローチ、伝統的な食文化の継承・伝承の推進、健康的な食の選択を支援する食環境の整備及び体験型学習の充実を図ることが重要である。

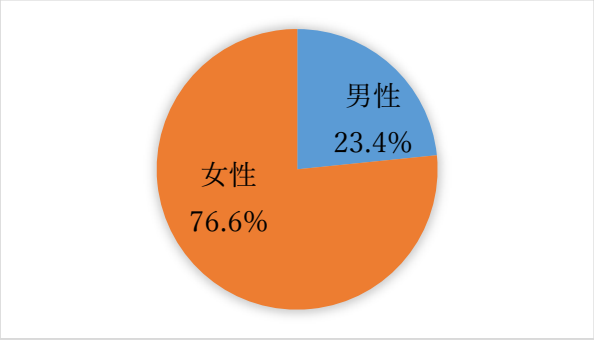
Ⅲ　調査結果の詳細

問１　あなたの性別をお答えください。

本調査の回答者は女性が 76.6%、男性が 23.4%であった。

カテゴリ	件数	(全体)%
男性	673	23.4
女性	2203	76.6
無回答	1	0.0
N （%ﾍﾞｰｽ）	2877	100

図1－1　性別

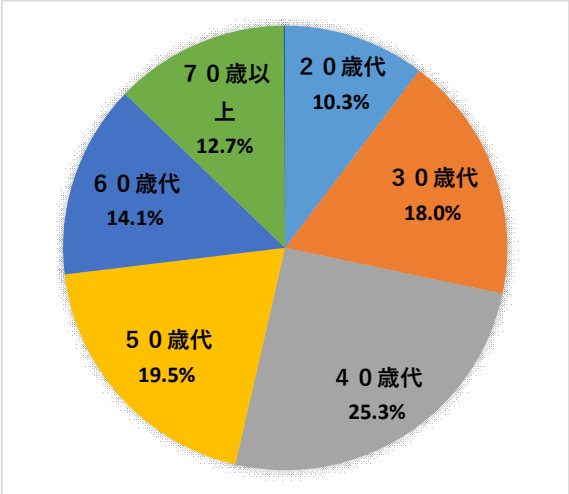


問２　あなたの年代をお答えください。

本調査の回答者の年代は、20 歳代が 10.3%、30 歳代が 18.0%、40 歳代が 25.3%、50 歳代が 19.5%、60 歳代が 14.1%、70 歳代以上が 12. 7%であった。

カテゴリ	件数	(全体)%
２０歳代	295	10.3
３０歳代	519	18.0
４０歳代	729	25.3
５０歳代	561	19.5
６０歳代	405	14.1
７０歳以上	366	12.7
無回答	2	0.1
N （%ﾍﾞｰｽ）	2877	100

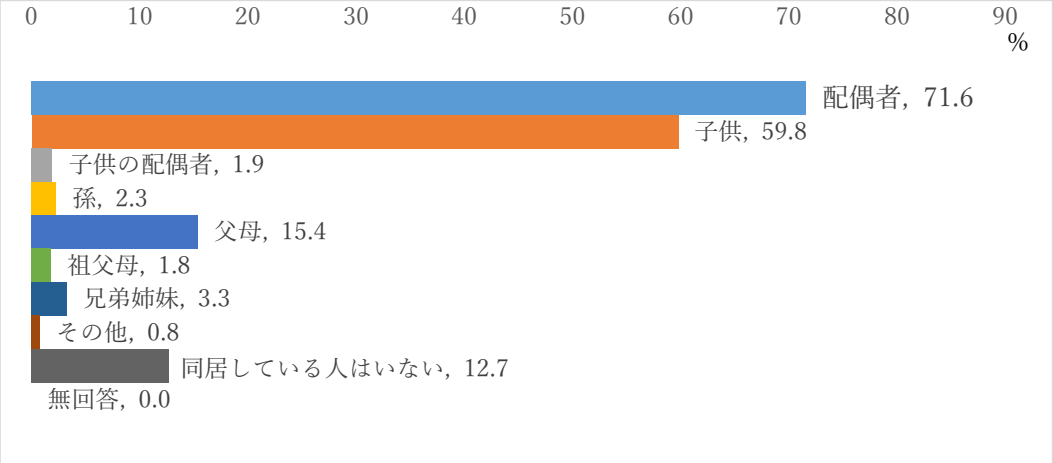
図２－１　年代



問3　あなたが現在同居されている方を、次の中からすべて選んでください。

同居されている方で最も多かったのは配偶者で 71.6%、次に子供(59.8%)、父母(15.4%)であった。また、同居している人はいないと回答した者は 12.7%であった。

図3－1 同居されている方

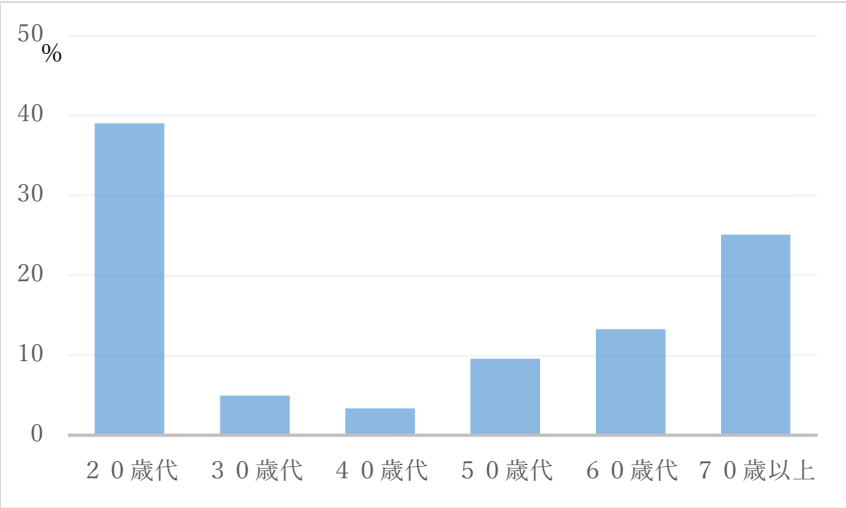


カテゴリ	配偶者	子供	子供の配偶者	孫	父母	祖父母	兄弟姉妹	その他	同居している人はいない	無回答	N （%ﾍﾞｰｽ）
件数	2061	1720	54	65	442	52	96	24	366	1	2877
(全体)%	71.6	59.8	1.9	2.3	15.4	1.8	3.3	0.8	12.7	0.0	100

（参考） 年代別にみた「同居している人はいない」と答えた割合（問 2×問3）

「同居している人はいない」と答えた割合を年代別にみると、20 歳代が最も多かった。

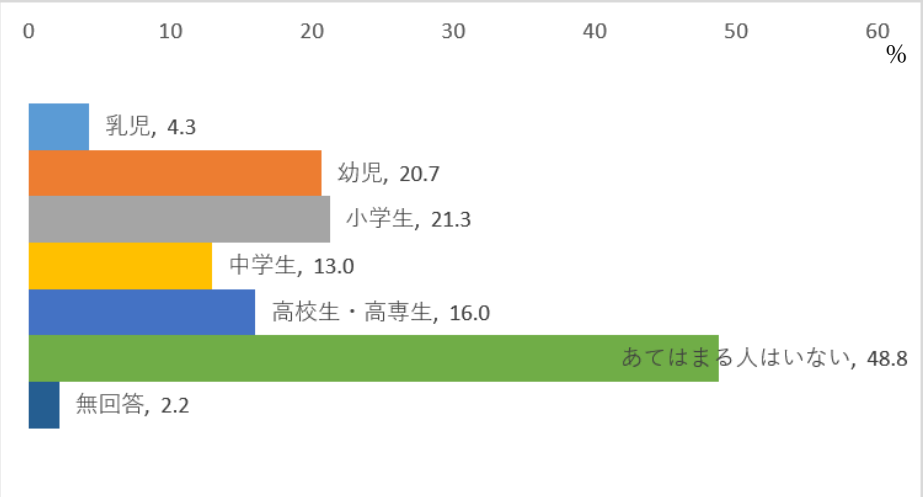
図3－2　同居している人はいない×年代



問4　同居している家族について、あてはまる方をすべて選んでください。

同居している家族に、乳児から高校生・高専生がいるかを聞いたところ、「あてはまる人はいない」と答えた割合が 48.8%あった。

図4－1　同居の家族

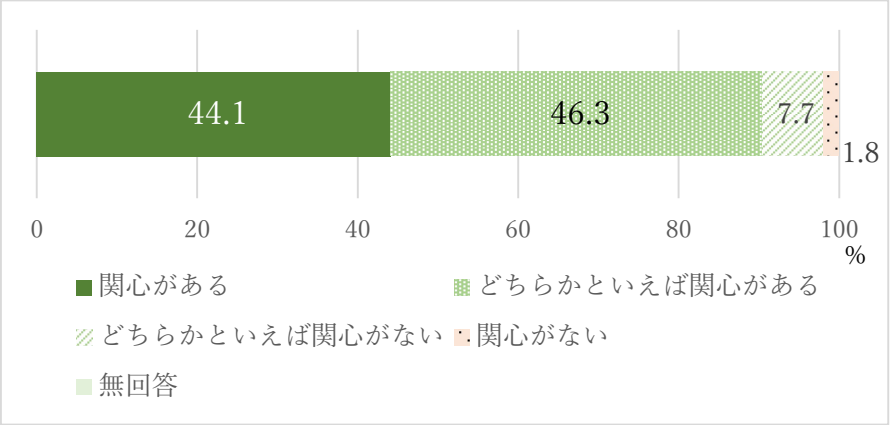


カテゴリ	乳児	幼児	小学生	中学生	高校生・高専生	あてはまる人はいない	無回答	N（%ベース）
件数	124	596	613	373	460	1404	63	2877
(全体)%	4.3	20.7	21.3	13.0	16.0	48.8	2.2	100

問5　あなたは、「食育」に関心がありますか。

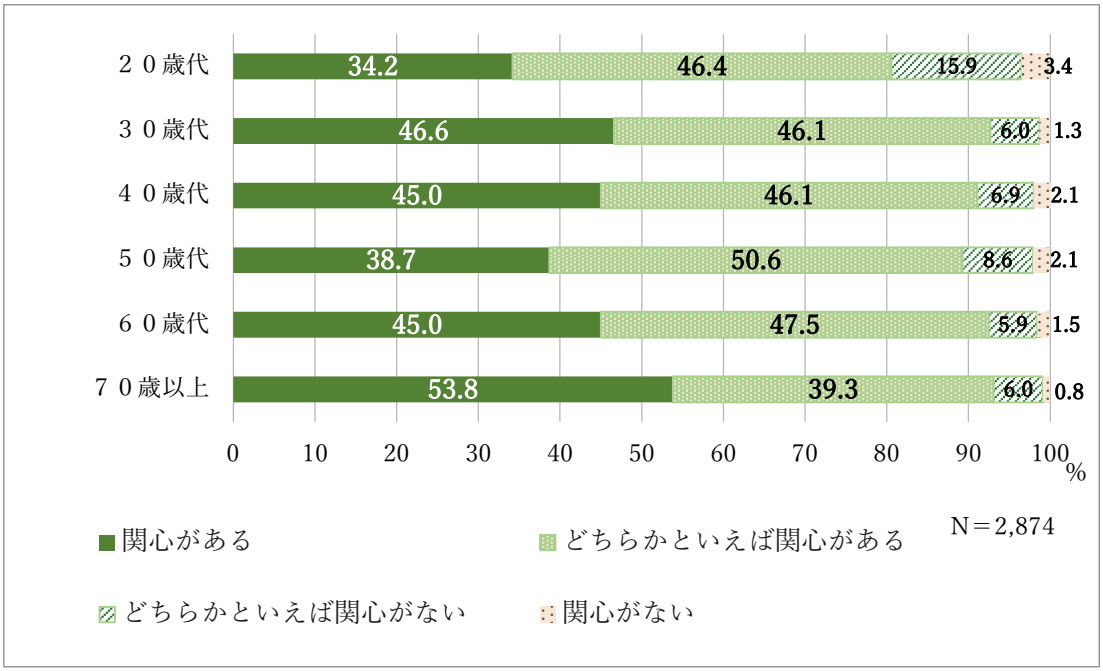
「食育」に関心があるかを聞いたところ、「関心がある」と回答した人の割合は 90.4%(「関心がある」44.1%＋「どちらかといえば関心がある」46.3%)であり、関心がない割合は 9.5%(「どちらかといえば関心がない」7.7%＋「関心がない」1.8%)であった。

図5－1　食育への関心



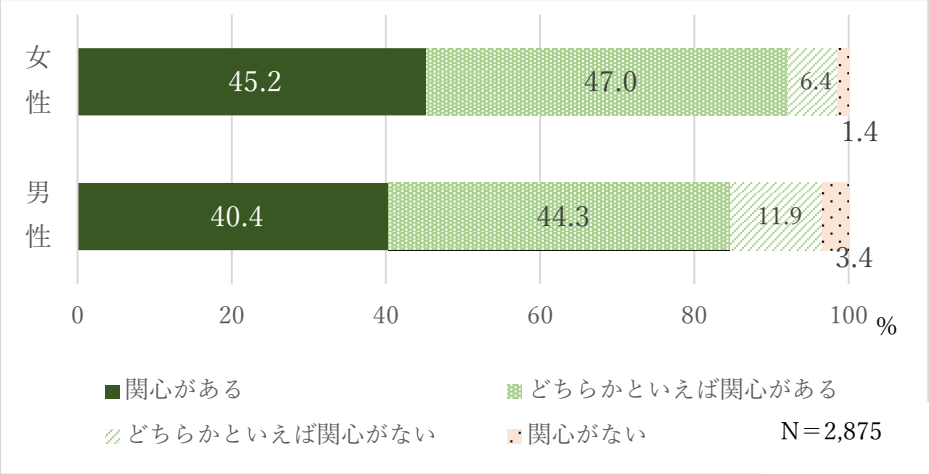
年齢別でみると、70 歳以上で「関心がある」と答えた割合が半数を超えている。

図5－2　食育への関心×年代別



性別にみると、関心があると答える割合は女性の方が高くなっている。

図5－3　食育への関心×性別



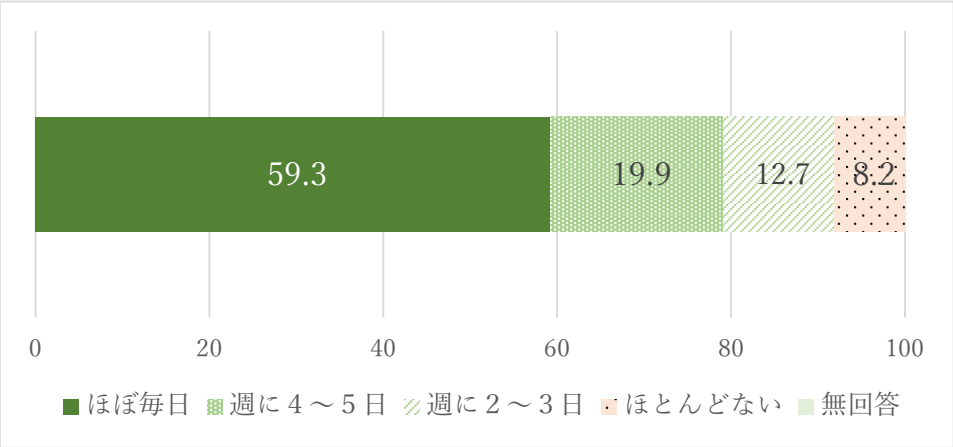
【本市の現状と特徴】

「食育に関心を持っている者の割合」は、本市では 90.4％であり、本市市民の食育に対する関心の高さがうかがえる。また、その傾向はいずれの年代においても認められた。参考値として国の目標値と比較すると、その水準を上回っていた。

問6　主食(ごはん、パン、麺など)・**主菜**(肉・魚・卵・大豆製品などを使った料理)・**副菜**(野菜・きのこ・いも・海藻などを使った料理)**をそろえて食べることが1日に２回以上あるのは、週に何日ありますか。**

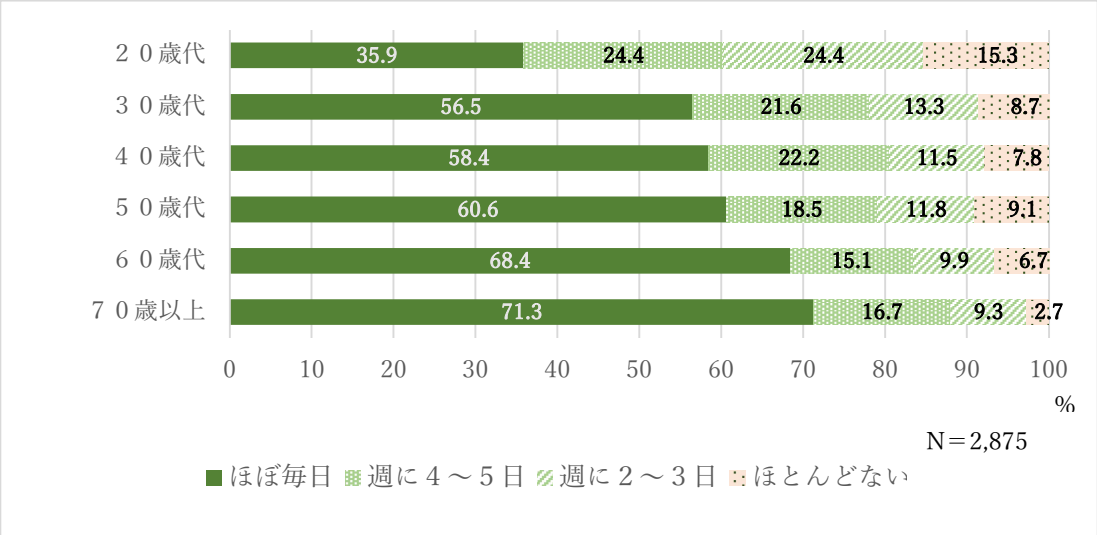
主食・主菜・副菜をそろえて食べることが１日に２回以上あるのは、週に何日あるかを聞いたところ、「ほぼ毎日」と答えた人の割合が 59.3%であった。「週に4～5 日」が 19. 9%、「週に 2～3 日」が 12.7%で、「ほとんどない」と答えた人の割合は 8. 2%であった。

図6－1　主食・主菜・副菜を１日に２回以上食べること



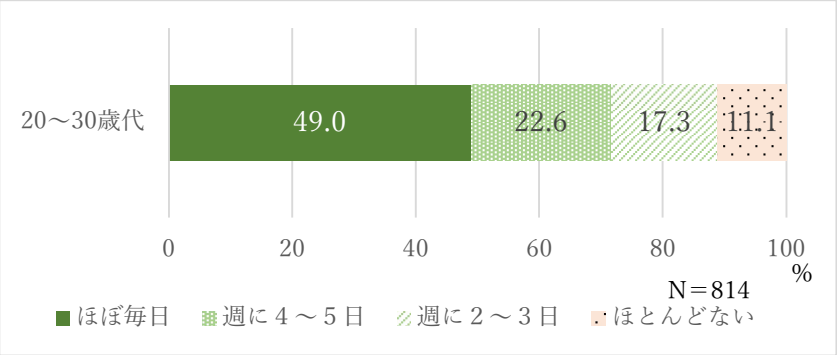
年代別にみると、「ほぼ毎日」と答える 20 歳代の割合は 35.9%となっており、「ほとんどない」と答える割合は 15.3%であった。

図6－2　主食・主菜・副菜を１日に２回以上食べること×年代別



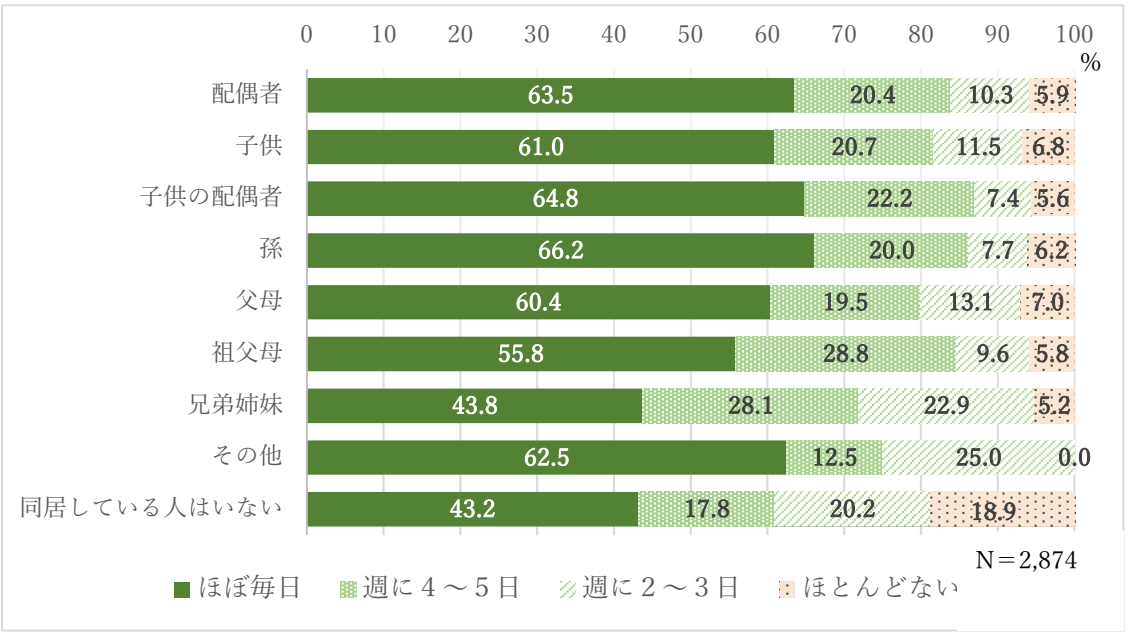
なお、国の整理との整合性を図るため、本項では 20 歳代及び 30 歳代を合わせた 20～39 歳を「若い世代」として再集計した。その結果「ほぼ毎日」と答えた若い世代は 49.0%であった。

図6－3　主食・主菜・副菜を１日に２回以上食べること×若い世代



同居者との関係をみたところ、一人暮らしの方に「ほとんどない」と答えた割合が多い。

図6－4　主食・主菜・副菜を１日に２回以上×同居されている方



【本市の現状と特徴】

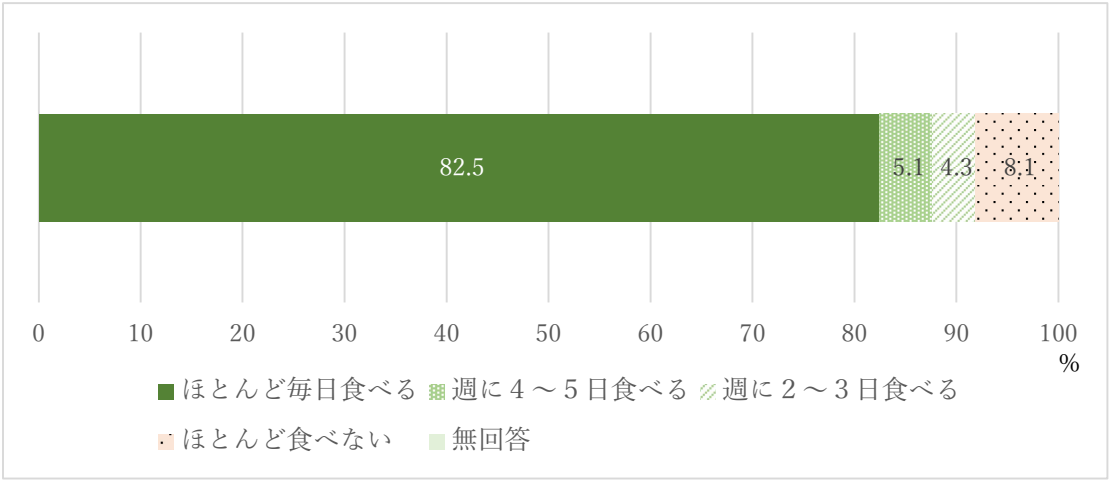
「主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を１日２回以上ほぼ毎日食べている者の割合」は、59.3%であった。参考値として国の目標値と比較すると、その水準を上回っていた。このことから、本市では主食・主菜・副菜を組み合わせたバランスの良い食生活が比較的実践されていることがうかがえる。しかしながら、その割合は 50%台に留まっており、引き続き、主食・主菜・副菜を組み合わせたバランスの良い食生活の実践の向上に向け取り組みが必要である。

また、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を１日２回以上「ほぼ毎日食べている」と答える若い世代の割合は 49.0%であった。国の現状値を上回っているものの、約半数にとどまっており、若い世代に対しても、引き続きバランスのよい食生活の普及・実践を促進していくことが重要と考えられる。

問7　あなたは、ふだん朝食を食べますか。

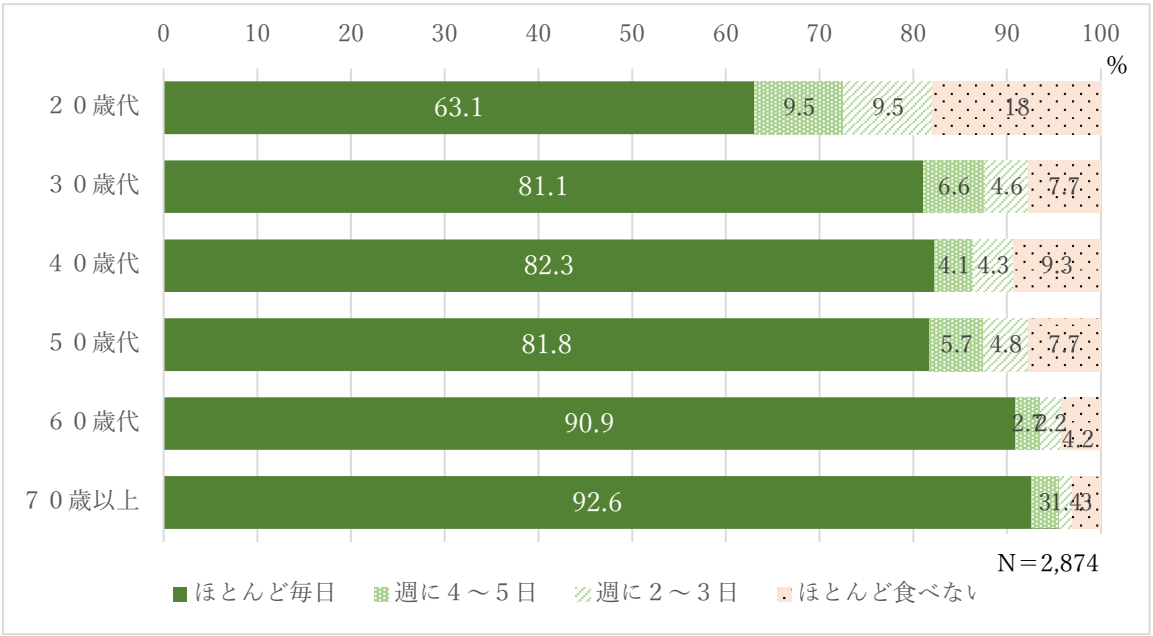
ふだん朝食を食べるかについて聞いたところ、「ほとんど毎日」と答えた人の割合が 82.5%であった。

図7－1 朝食を食べること



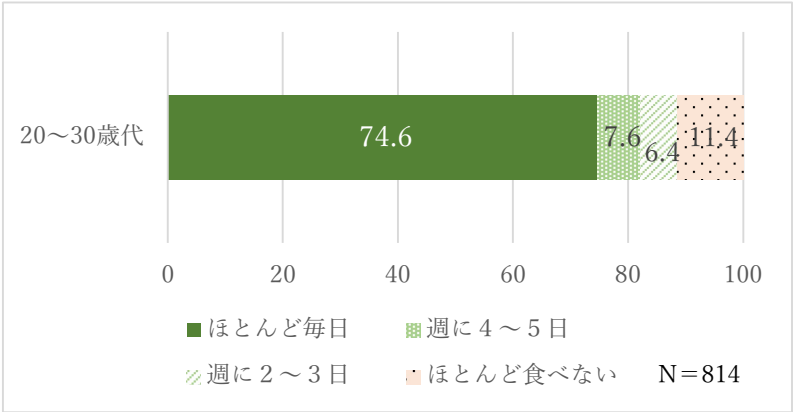
年代別にみると、20 歳代では「ほとんど毎日」と答える割合は、他の世代に比べて少なく、「ほとんど食べない」と回答した割合は 18.0%であった。

図7－2 朝食を食べること×年代別



また、朝食を欠食する(「週に2～3 回食べる」6.4%＋「ほとんど食べない」11.4%)若い世代の割合は、17.8%であった。

図7－3 朝食を食べること×若い世代



【本市の現状と特徴】

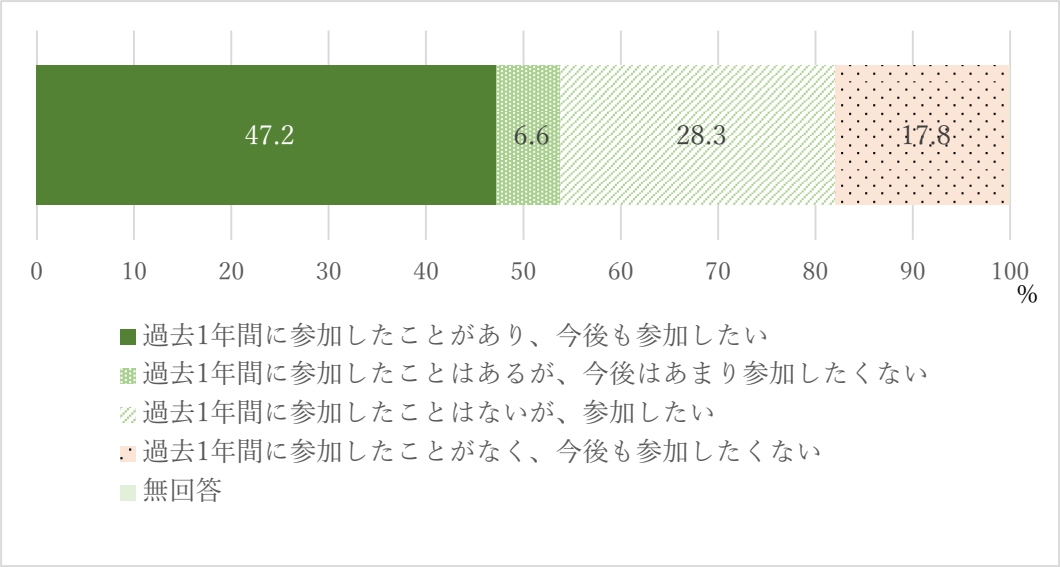
「朝食を欠食する若い世代の割合」は、本市では 17.8%となっていた。若い世代に対する朝食摂取の重要性の普及啓発や、朝食を取りやすい生活習慣づくりへの支援が必要と考えられる。

問8　地域や所属コミュニティ（職場等を含む）での食事会等について、あなたの状況に最も近いもの選んでください。

地域や所属コミュニティでの食事会等について聞いたところ、「参加したい」とする割合は75.5%（「過去１年間に参加したことがあり、今後も参加したい」47.2%＋「過去１年間に参加したことはないが、参加したい」28.3%）と高くなっている。また、「過去 1 年間に参加したことがある」割合は、半数以上（「過去 1 年間に参加したことがあり、今後も参加したい」47.2%＋「過去 1 年間に参加したことはあるが、今後はあまり参加したくない」6.6%）であるが、一方で参加したことがない割合も 46.1 %（「過去 1 年間に参加したことはないが、参加したい」28.3%＋「過去 1 年間に参加したことがなく、今後も参加したくない」17.8%）となっている。

なお、今後参加したいと回答した者のうち過去 1 年間に実際に参加経験がある者は、参加希望者全体の 62.5%を占めた。一方で参加したいと回答した者のうち、過去 1 年間に実際に参加経験がない者が参加希望者全体の 37.5%であった。

図8－1　食事会等への参加



年代別・性別で特に大きな差はみられなかったが、70 歳以上は参加意向があるにもかかわらず参加経験のない者は、参加希望者の 43.3%を占めた。

図8－2　食事会等への参加×年代別

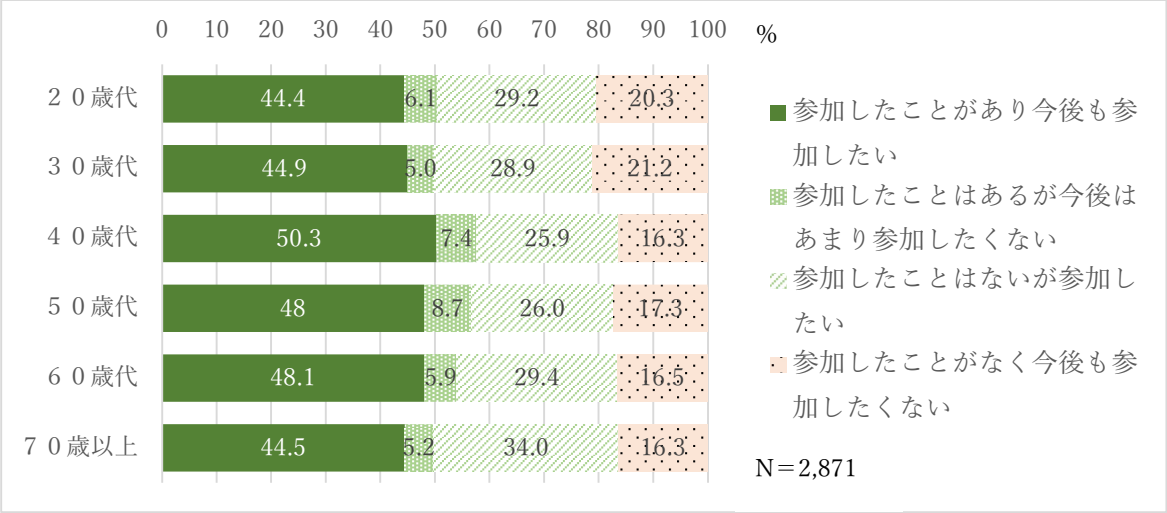
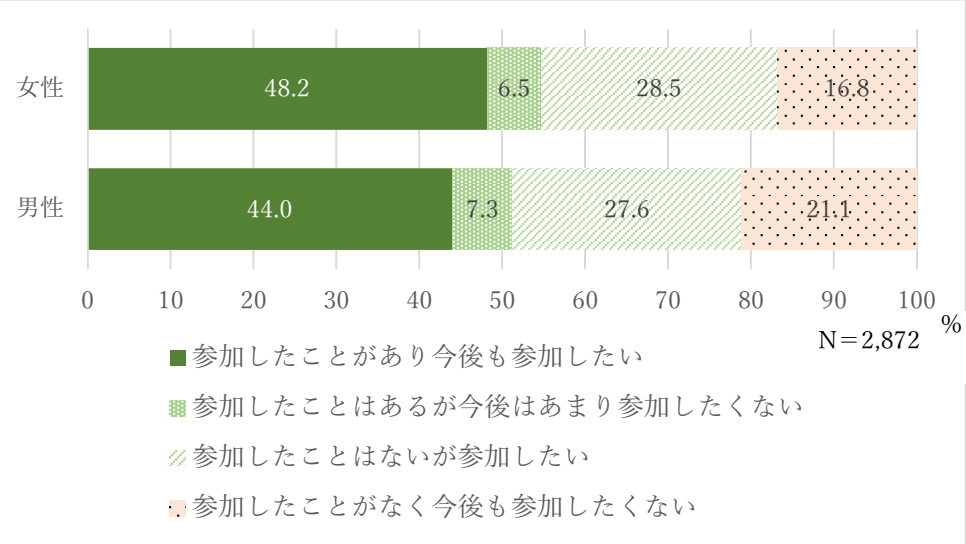


図8－3　食事会等への参加×性別



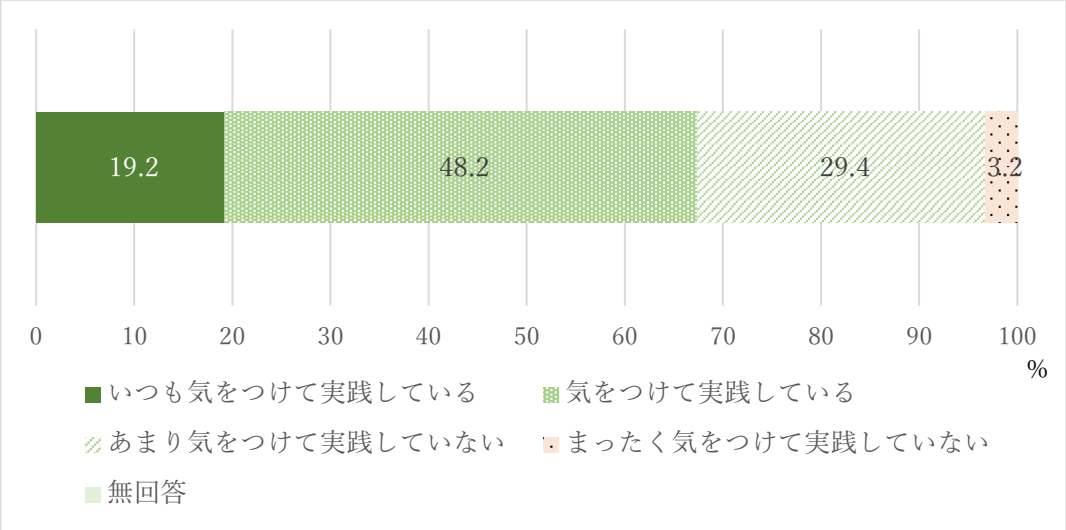
【本市の現状と特徴】

本市では、地域や所属コミュニティでの食事会等への参加意向は 75.5%と高かったことから、参加したいと考える者が実際に参加できるよう、地域における共食の機会の充実や参加しやすい環境づくりが重要である。

問9　生活習慣病の予防や改善のために、あなたは、ふだんから適正体重の維持や減塩などに気をつけた食生活を実践していますか。

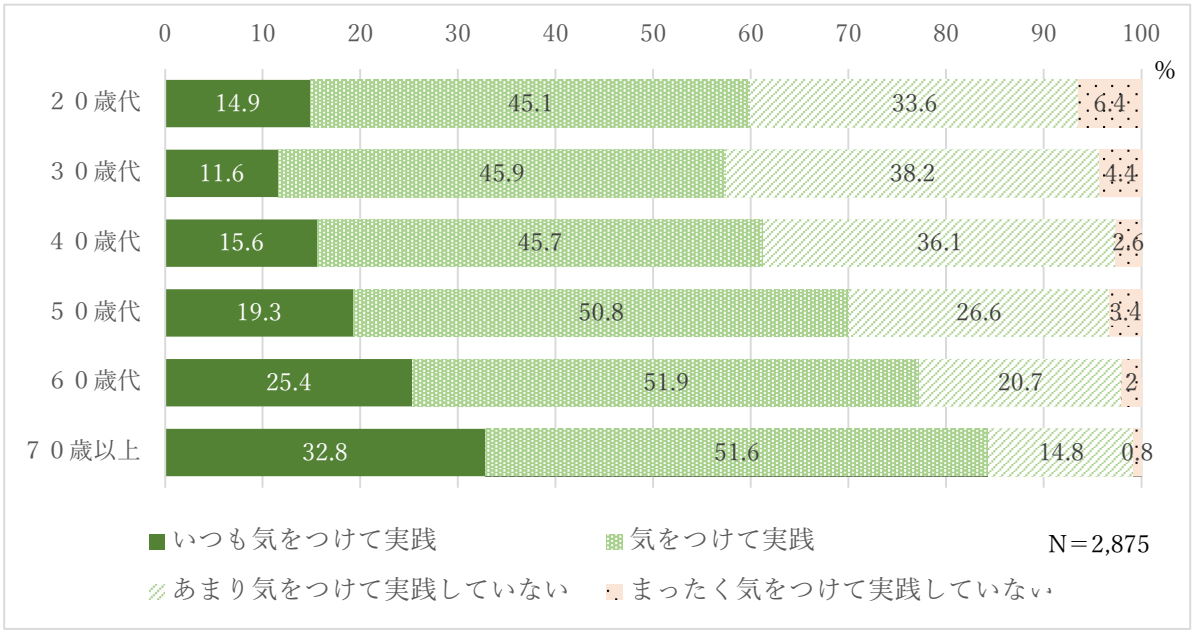
生活習慣病の予防や改善のために、ふだんから適正体重の維持や減塩などに気をつけた食生活を実践しているかを聞いたところ、「気をつけて実践している」と答えた人の割合は67.4%(「いつも気をつけて実践している」19.2%+「気をつけて実践している」48.2%)であった。

問9－1　気をつけた食生活の実践



年代別にみると、年代が高くなるほど、生活習慣病予防等を意識した食生活を実践している割合が高かった。一方、40歳代以下では約4割が実践していなかった。

図9－2　気をつけた食生活の実践×年代別



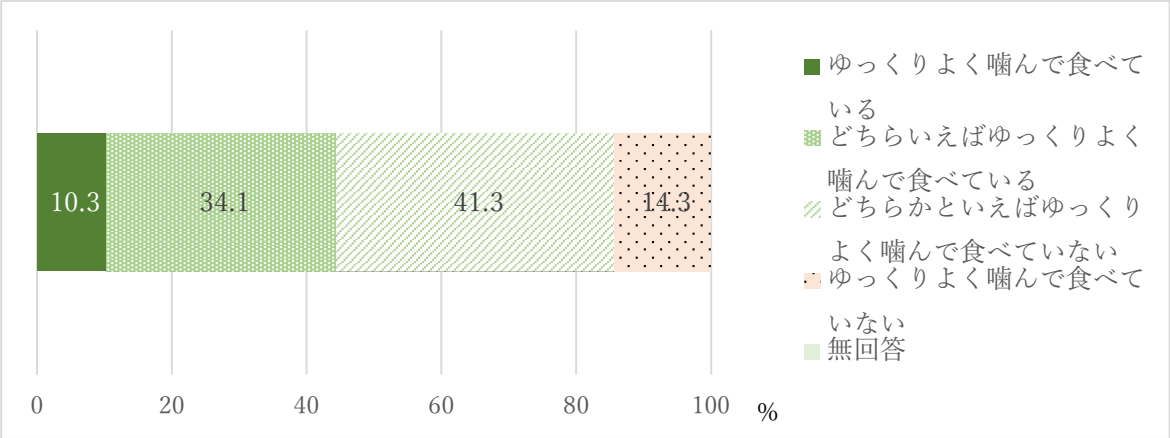
【本市の現状と特徴】

「生活習慣病の予防や改善のために、ふだんから適正体重の維持や減塩等に気をつけた食生活を実践する割合」は本市では 67.4%となっていた。年代別では、年齢が高くなるほど実践割合が高く、40 歳代以下では実践していない者が約4割みられたことから、若い世代への普及啓発が課題である。

問10　あなたは、ふだんゆっくりよく噛んで食べていますか。

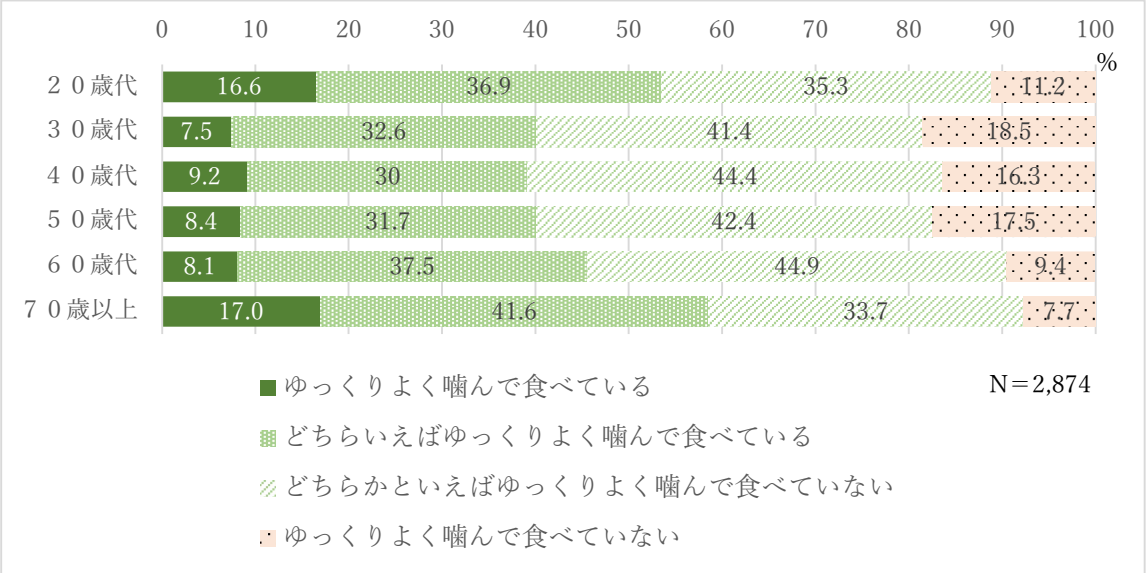
ふだんゆっくりよく噛んで食べているか聞いたところ、「ゆっくりよく噛んで食べている」と回答した人の割合が 44.4%(「ゆっくりよく噛んで食べている」10.3%＋「どちらかといえばゆっくりよく噛んで食べている」34.1%)、「ゆっくりよく噛んで食べていない」と回答した人の割合が55.6%(「どちらかといえばゆっくりよく噛んで食べていない」41.3%＋「ゆっくりよく噛んで食べていない」14.3%)となっている。

図 10−1　ゆっくりよく噛んで食べているか



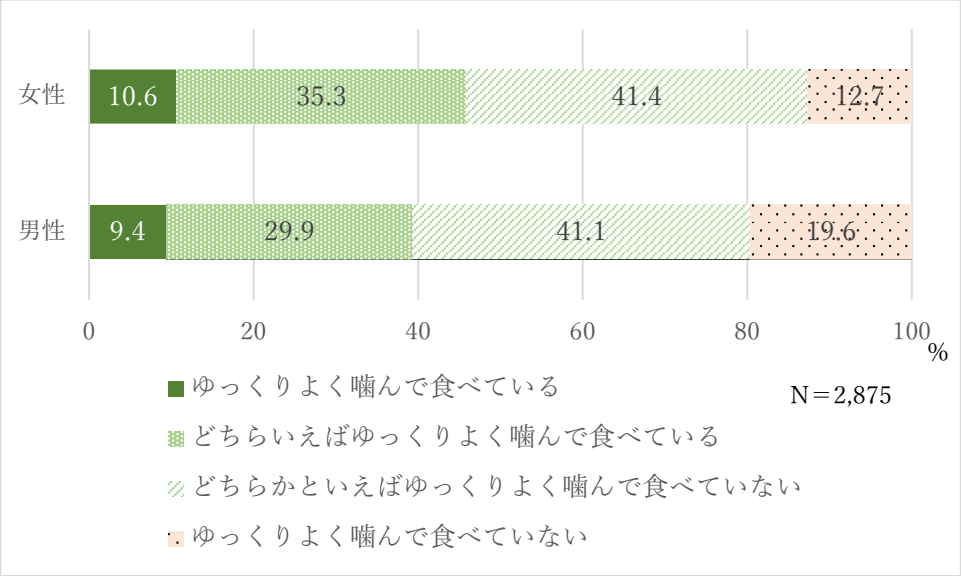
年代別にみると、「ゆっくりよく噛んで食べている」と回答した人の割合は 20 歳代、70 歳以上で高い。

図 10−2　ゆっくりよく噛んで食べているか×年代別



性別にみると、男性は女性に比べて、ゆっくりよく噛んで食べていない者の割合が高かった。

図 10－3　ゆっくりよく噛んで食べているか×性別



【本市の現状と特徴】

「ゆっくりよく噛んで食べる者の割合」は、本市では 44.4％であった。年代別にみると、「ゆっくりよく噛んで食べている」と回答した割合は 20 歳代及び 70 歳以上で高かった。また、性別では男性の実践割合が女性より低かった。このことから、よく噛んで食べることの重要性について、引き続き周知・啓発を図る必要がある。

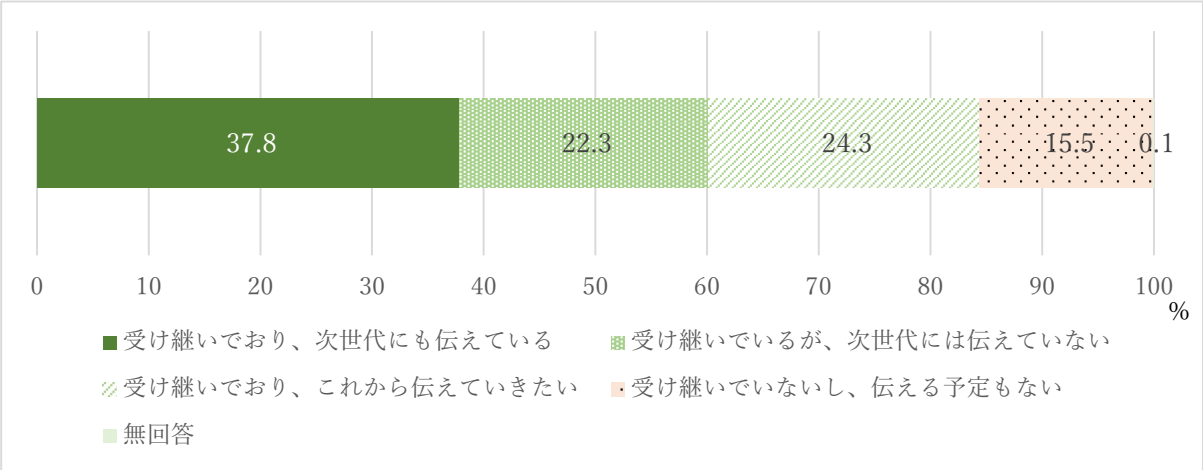
問11　あなたは、郷土料理や伝統料理、箸づかいなどの作法を受け継ぎ、次世代（子供や地域など）へ伝えていますか。

郷土料理や伝統料理、箸づかいなどの食べ方・作法を受け継いでいるか聞いたところ、「受け継いでおり、次世代にも伝えている」と回答した割合は 37.8%であった。

なお、「受け継いでいる」と回答した人の割合は 84.4%（「受け継いでおり、次世代にも伝えている」37.8%＋「受け継いでいるが、次世代には伝えていない」22.3%＋「受け継いでおり、これから伝えていきたい」24.3%）、「受け継いでいない」と回答した人の割合が 15.5%（「受け継いでいないし、伝える予定もない」15.5%）となっている。

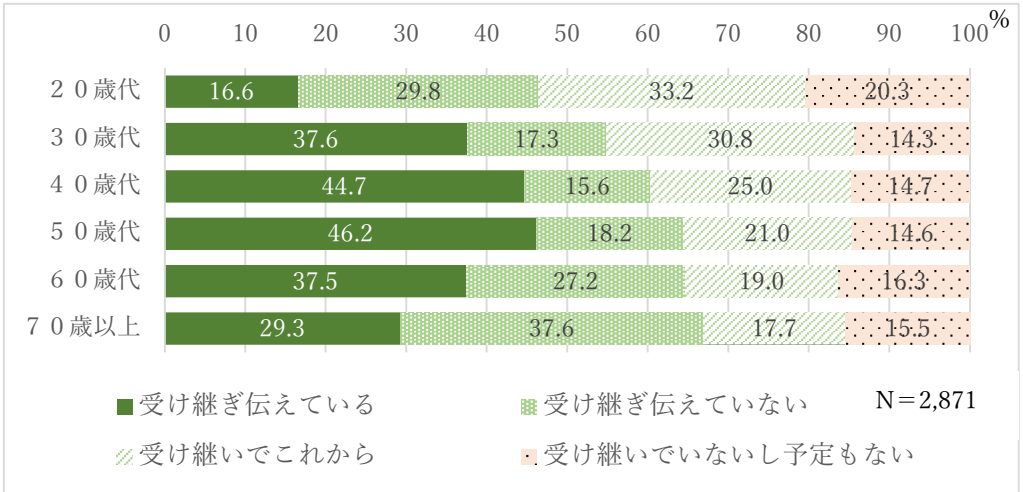
現状で「次世代に伝えていない」（22.3%）、「伝える予定もない」（15.5%）の合計は、37.8%であった。

図 11−1　伝統料理や作法を受け継ぎ伝えているか



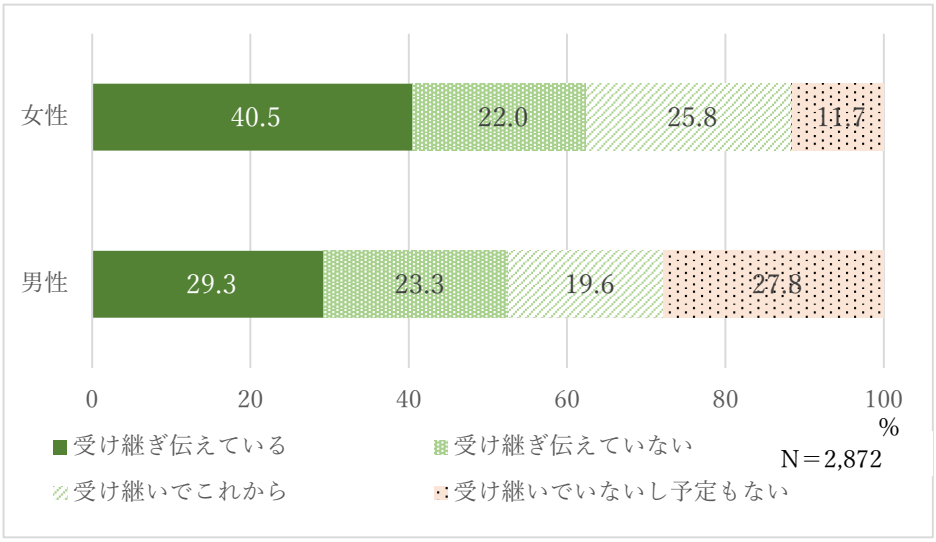
年代別でみると、どの年代も受け継いでいる割合は 8 割程度となっている。

図 11−2　伝統料理や作法を受け継ぎ伝えているか×年代別



一方、性別でみると、受け継いでいないと回答する女性は 11.7%に対し、男性は 27.8%となっている。

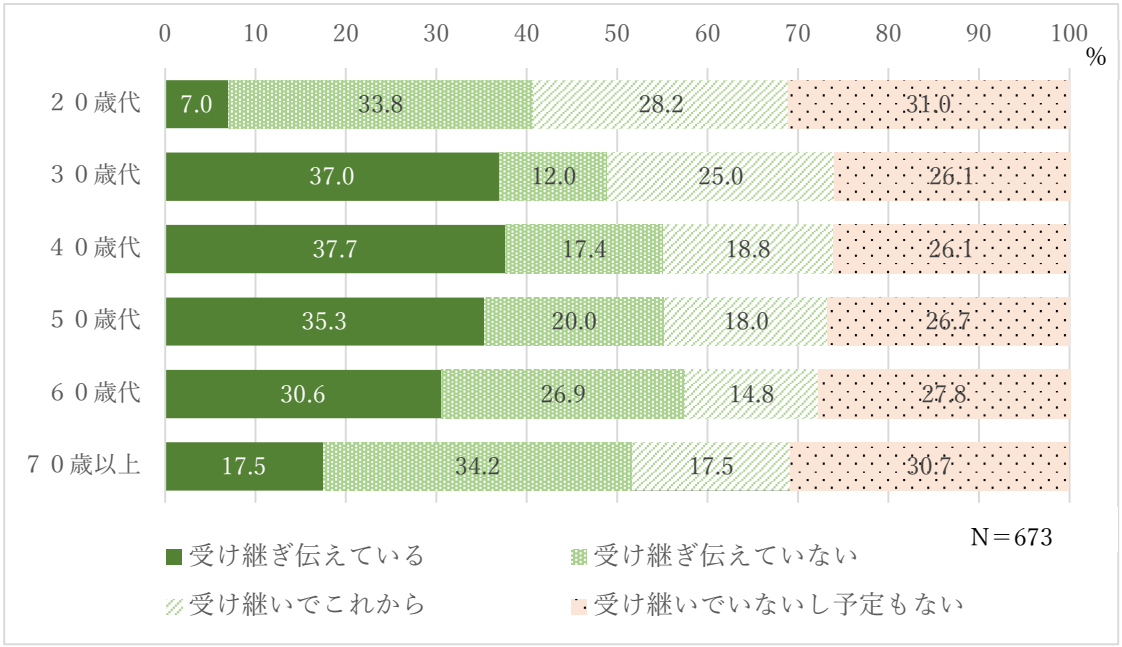
図 11－3 伝統料理や作法を受け継ぎ伝えているか×性別



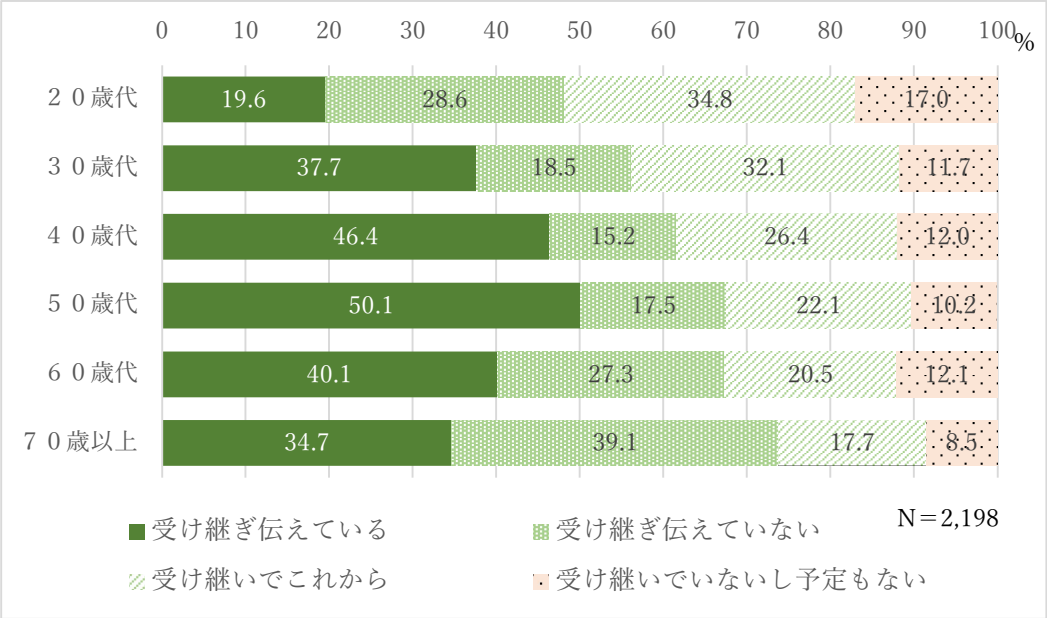
性別･年代別にみると、すべての年代において、男性は女性に比べて伝統的な食文化等を受け継いでいない者の割合が高い傾向がみられた。

図 11－4 伝統料理や作法を受け継ぎ伝えているか×性別×年代別

＜男性＞



＜女性＞



【本市の現状と特徴】

「地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えている」割合は、37.8%であった。なお、食文化等を「受け継いでいる」と回答した者を母数としてみると、実際に次世代へ伝えている者は 44.8%であった。このことから、受け継がれた食文化等が必ずしも次世代への継承につながっているとはいえない状況がうかがえた。

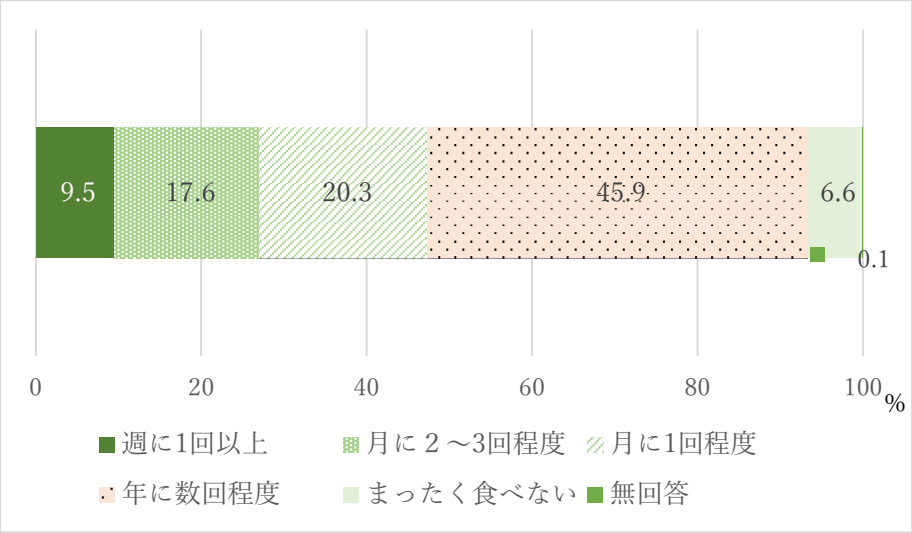
また、性別・年代別にみると、すべての年代において、男性は女性に比べて伝統的な食文化等を受け継いでいない者の割合が高い傾向がみられた。

このことから、伝統的な食文化等の継承は一定程度図られているものの、性別による違いもみられ、こうした実態を踏まえながら、食文化の継承および、継承した文化を次世代へ伝承していくための取り組みが課題であると考えられる。

問12　あなたは、いわゆる郷土料理や伝統料理をどのくらいの頻度で食べていますか。

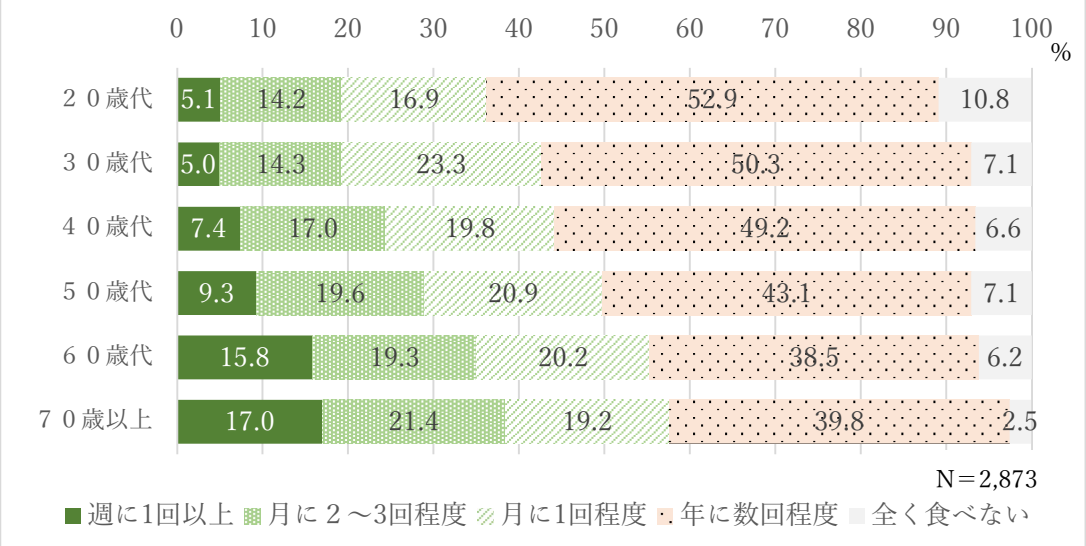
いわゆる郷土料理や伝統料理をどのくらいの頻度で食べているか聞いたところ、「月一回以上」は 47.4%(「週に 1 回以上」9.5%+「月に 2～3 回程度」17.6%+「月に 1 回程度」20.3%)であった。最も多かったのが「年に数回程度」で 45.9%となっていた。「まったく食べない」と答えた割合は 6.6%であった。

図 12－1　郷土料理や伝統料理を食べる頻度



20 歳代・30 歳代は、郷土料理や伝統料理を食べる頻度が低い。

図 12－2　郷土料理や伝統料理を食べる頻度×年代別

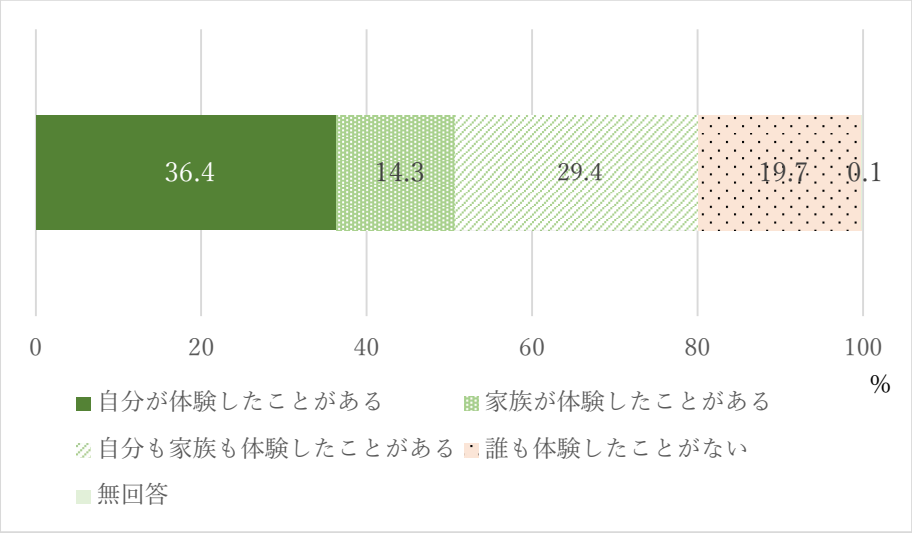


【本市の現状と特徴】
「郷土料理や伝統料理を月 1 回以上食べている者の割合」は、47.4%であった。年代が高くなるほど、郷土料理や伝統料理を食べる頻度も高くなっていることから、若い世代への食文化の継承や郷土料理に親しむ機会の充実が課題である。

問13　これまで、あなた又はあなたの家族の中で、田植え（種まき）、稲刈り、野菜の収穫、家畜の世話など農林漁業体験をしたことのある人はいますか。

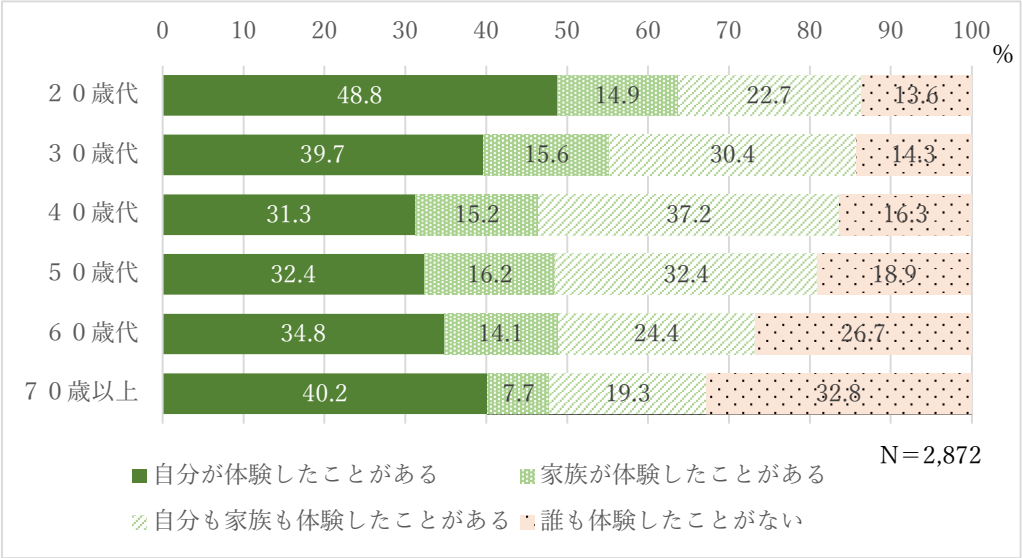
これまでの農林漁業体験を聞いたところ、「体験したことがある」は 80.1%（「自分が体験したことがある」36.4%＋「家族が体験したことがある」14.3%＋「自分も家族も体験したことがある」29.4%）であった。

図 13－1　農林漁業体験



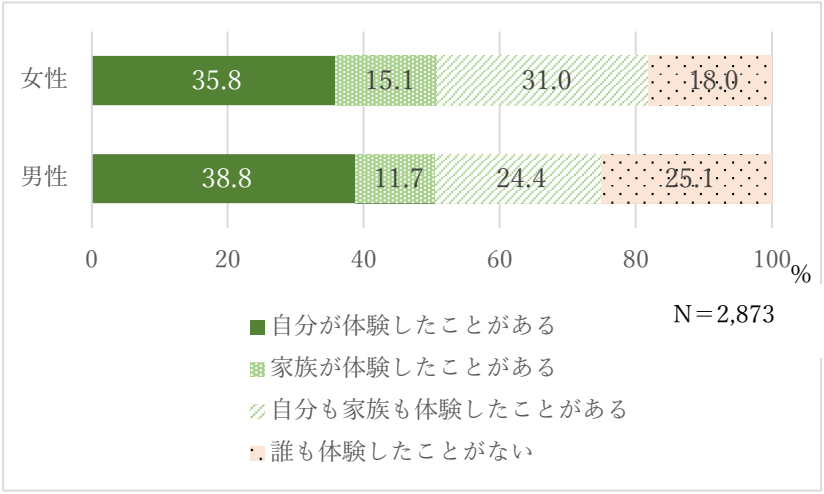
「自分が体験したことがある」は全世代の中で 20 歳代の割合が最も高く（48.8%）、「家族が体験したことがある」「自分も家族も体験したことがある」を合わせると 86.4%になっている。一方、「誰も体験したことがない」との割合は 70 歳以上で最も高くなっていた。

図 13－2　農林漁業体験×年代別



性別でみた場合、体験したことがないと回答する割合は、男性の方が高くなっていた。

図 13－3　農林漁業体験×性別



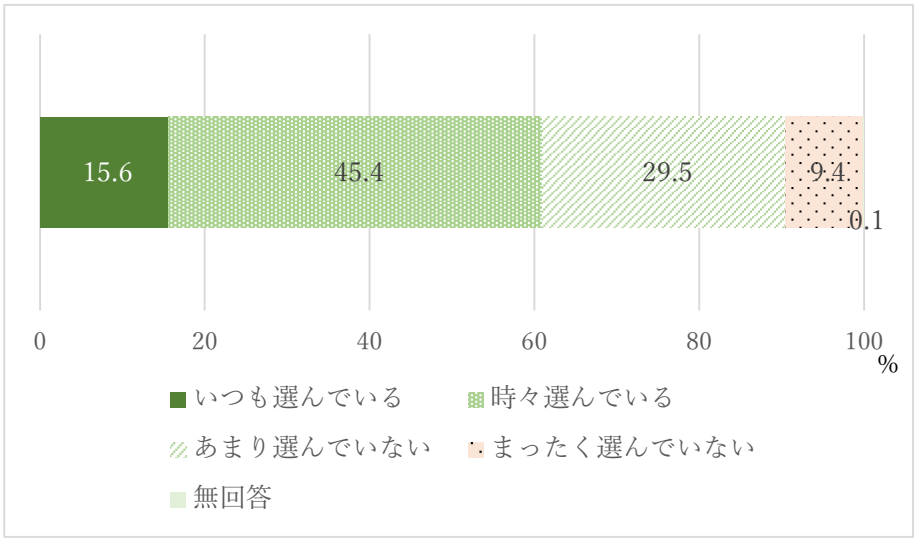
【本市の現状と特徴】

「農林漁業体験をした市民（世帯）の割合」は 80.1%と高い水準となっていた。参考値として国の目標値と比較しても、その水準を上回っており、本市では農林漁業に触れる機会が多い状況にあることがうかがえる。このことから、本市における農林漁業体験の取り組みは一定の成果を上げているものと考えられる。とくに若い世代で体験した割合が多いことから、食や農への関心を高める機会として、こうした世代への取り組みが浸透している可能性が示唆された。一方で男性には体験したことがないと答える割合も高いことから、今後も継続的な体験機会の提供を通じて、農林漁業への理解促進を図ることが重要である。

問14　あなたは、日頃から環境に配慮した農林水産物・食品（有機農産物や過剰包装を控えた商品など環境への負荷を低減したもの）を選んでいますか。

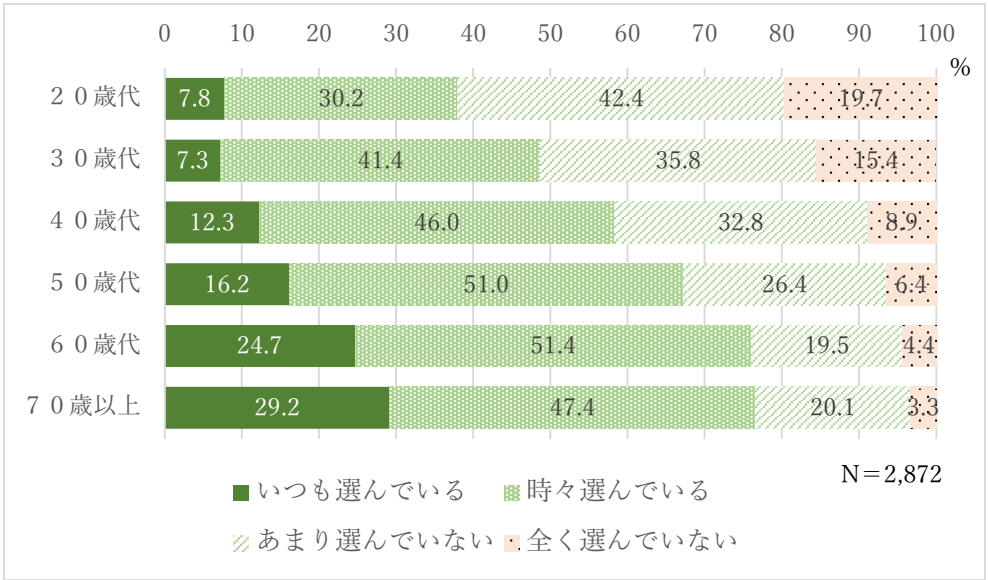
環境に配慮した農林水産物・食品を選んでいるかについて聞いたところ、「選んでいる」と答えた割合は 61.0%（「いつも選んでいる」15.6%＋「時々選んでいる」45.4%）であった。「まったく選んでいない」と答えた割合は 9.4%であった。

図 14－1　環境に配慮した農林水産物・食品を選んでいるか



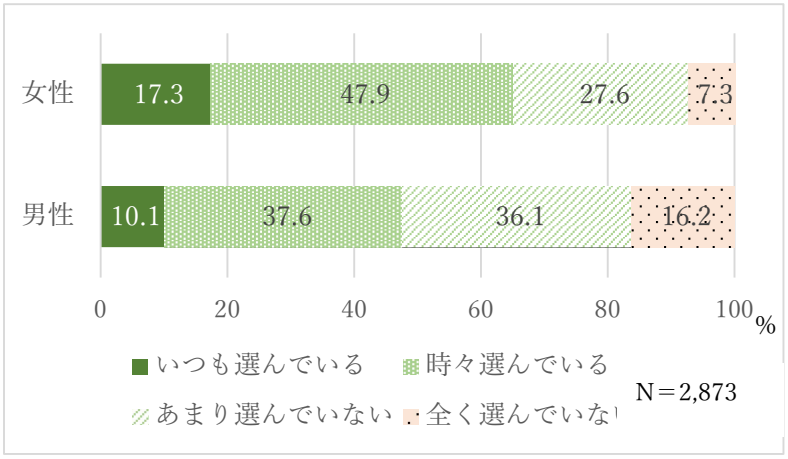
年代別にみると、年齢が高くなるほど環境に配慮した製品を日常的に選ぶ割合も高くなっている。

図 14－2　環境に配慮した農林水産物・食品を選んでいるか×年代別



性別にみると、「選んでいる」と答える割合は女性の方が高かった。

図 14－3　環境に配慮した農林水産物・食品を選んでいるか×性別



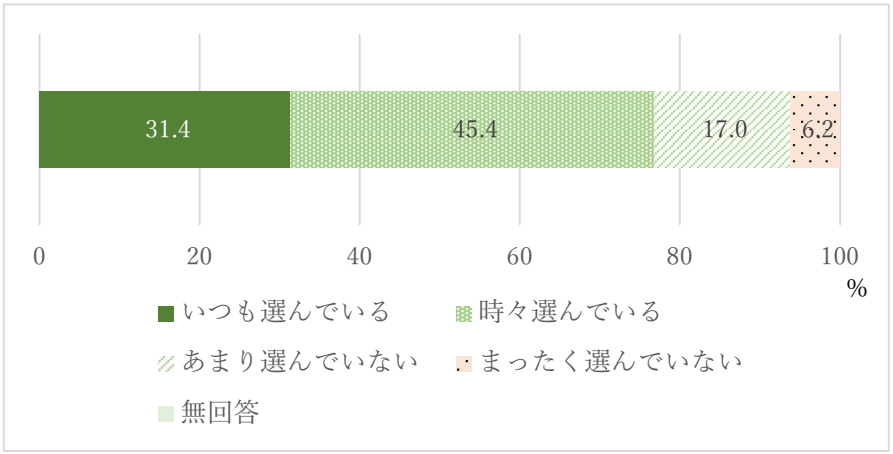
【本市の現状と特徴】

「環境に配慮した農林水産物・食品を選ぶ者の割合」は、本市では 61.0%であった。年代別にみると、年齢が高くなるほど環境に配慮した製品を日常的に選ぶ割合が高くなっていたこと、性別にみると女性の方が選ぶ割合が高くなっていたことから、若年層を中心に環境に配慮した農林水産物・食品に対する理解や関心を高める取り組みが求められる。

問15　あなたは、産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選んでいますか。

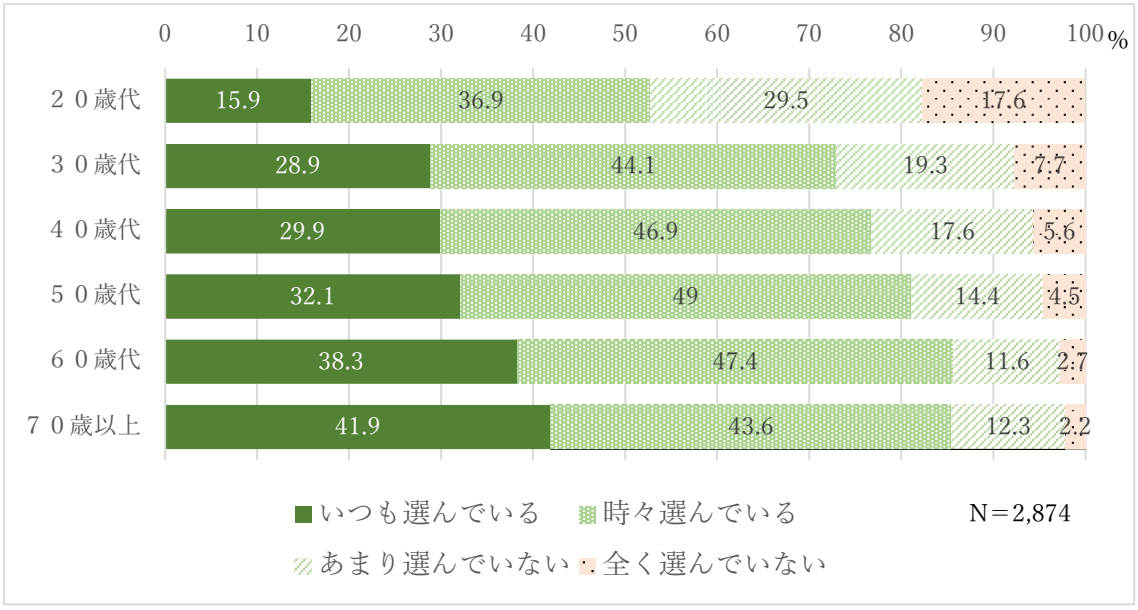
産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選んでいるかを聞いたところ、「選んでいる」と回答した割合は 76.8%(「いつも選んでいる」31.4%＋「時々選んでいる」45.4%)であった。

図 15－1　産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選んでいるか



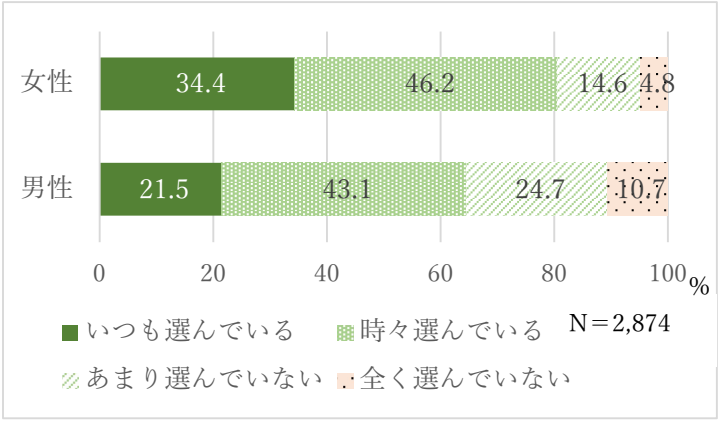
年代別にみると、「いつも選んでいる」は年代が上がるほど高い傾向にあり、選んでいる(「いつも選んでいる」「時々選んでいる」)と回答する割合は、50 歳代以上では 80%を超えている。

図 15－2　産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選んでいるか×年代別



性別にみると、女性の方が選んでいる割合は高かった。

図 15－3　産地や生産者を意識して農林水産物･食品を選んでいるか×性別



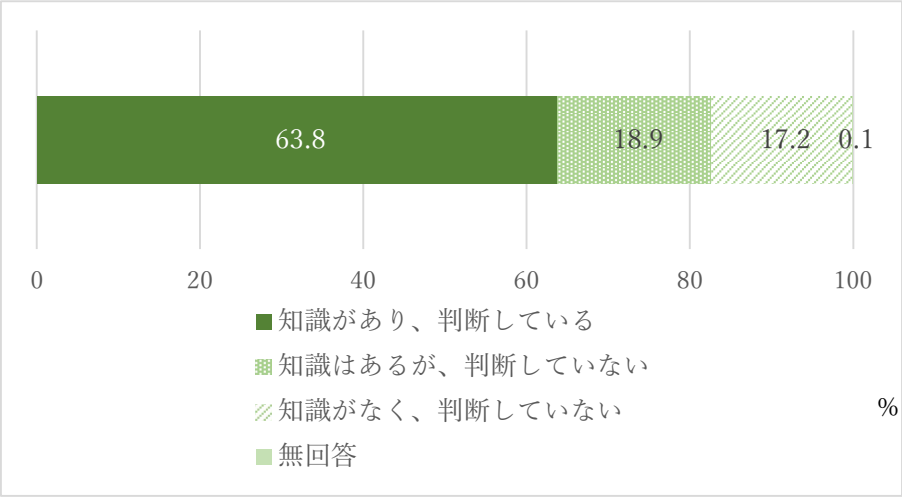
【本市の現状と特徴】

「産地や生産者を意識して農林水産物･食品を選ぶ者の割合」は、76.8％であった。年代別にみると、「いつも選んでいる」と回答した割合は年齢があがるほど高い傾向がみられた。また性別では、女性の方が高い割合を示していた。本市においては、産地や生産者を意識した食品選択は一定程度定着していることがうかがえる。

問16　あなたは、安全な食生活を送るために、基礎的な知識を理解し判断していますか。

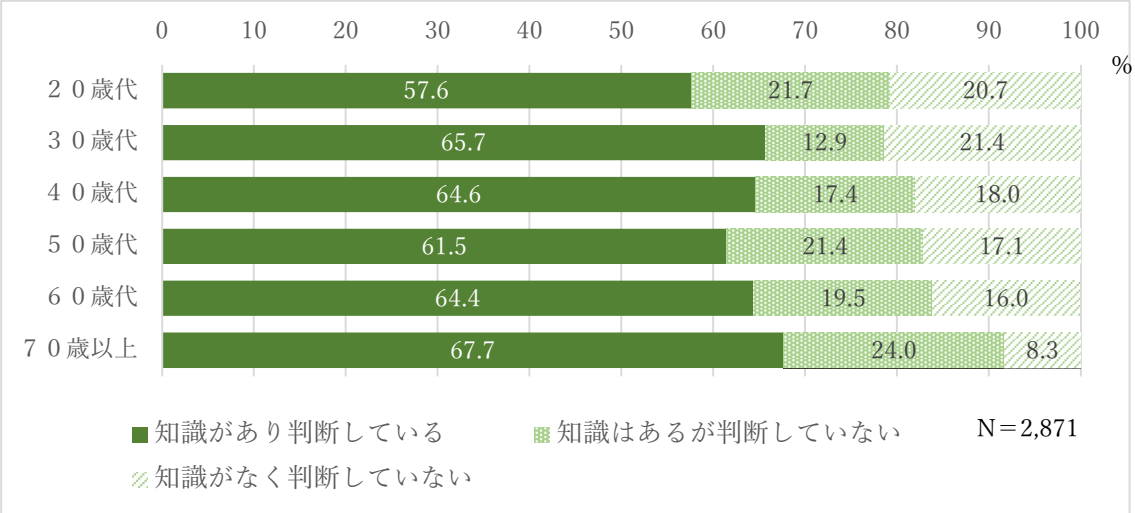
安全な食生活を送るために、基礎的な知識を理解し判断しているかを聞いたところ、「知識があり、判断している」と答えた割合は 63.8％であった。一方、「知識がある」と回答した割合は82.7%(「知識があり、判断している」63.8％＋「知識はあるが判断していない」18.9％)となっており、「知識がない」と回答した割合は 17.2％であった。

図 16－1　安全な食生活のための基礎的な知識と判断



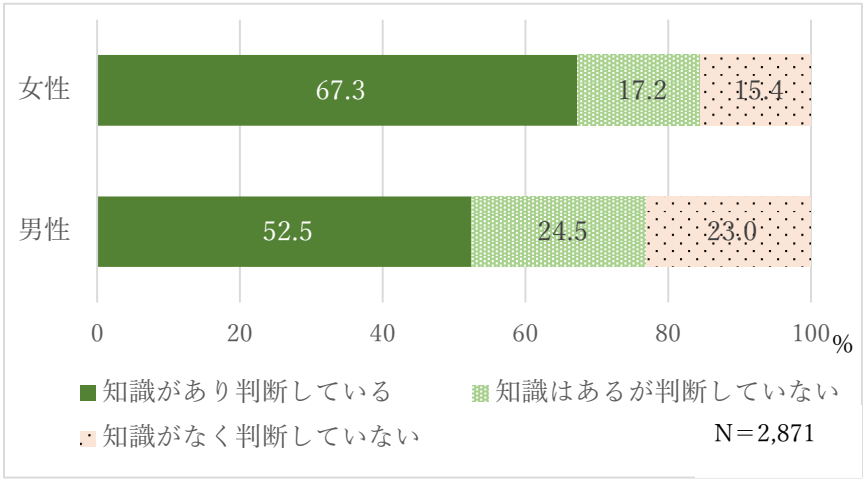
年代別にみると、全体として大きな差はみられなかったものの、20 歳代では「知識があり判断している」と回答した割合が他の年代に比べて低い傾向がみられた。

図 16－2　安全な食生活のための基礎的な知識と判断×年代別



性別にみると、女性の方が男性に比べて「知識があり、判断している」と答える割合は高い。

図 16－3　安全な食生活のための基礎的な知識と判断×性別



【本市の現状と特徴】

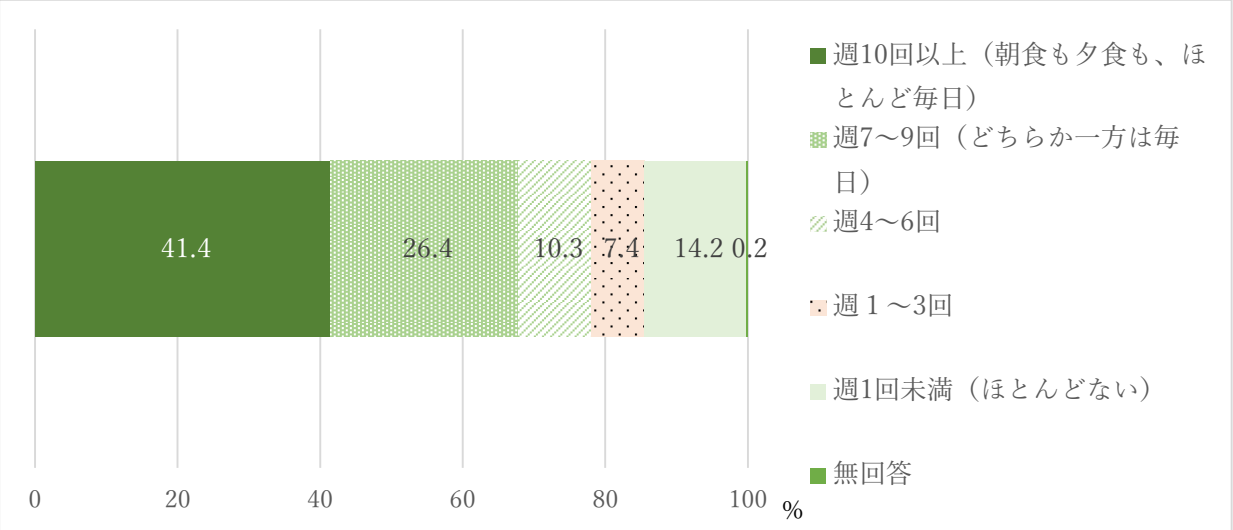
「食品の安全性について知識があり、自ら判断している」と回答した割合は 63.8%であった一方、「食品の安全性について知識がある」と回答した割合は 82.7%であった。このことから、食品の安全性に関する知識を有している者は多いものの、その知識を活用して自ら判断する段階には至っていない者も一定数存在することがうかがえる。

また、年代別・性別にみると、若年層で「知識があり、自ら判断している」と回答した割合が低い傾向がみられたことから、食品の安全性に関する知識の定着に加え、それらを適切に活用して主体的に判断する力を育むための普及啓発が求められる。

問 17　あなたは、家族と一緒に朝食や夕食を食べることがどのくらいありますか。

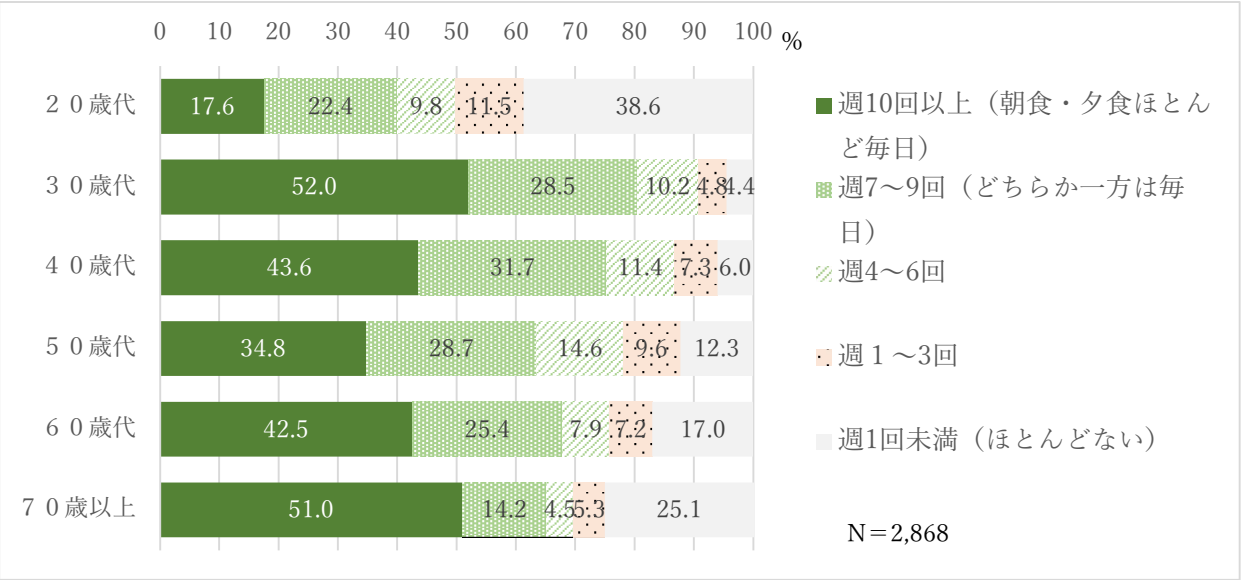
家族と一緒に朝食や夕食を食べることがどのくらいあるかを聞いたところ、週 10 回以上(朝食も夕食も、ほとんどが毎日)は 41.4%であり、週7～9 回(どちらか一方は毎日)は 26.4%であった。また、週 1 回未満(ほとんどない)割合は 14.2%であった。

図 17－1　家族との食事(朝食・夕食)



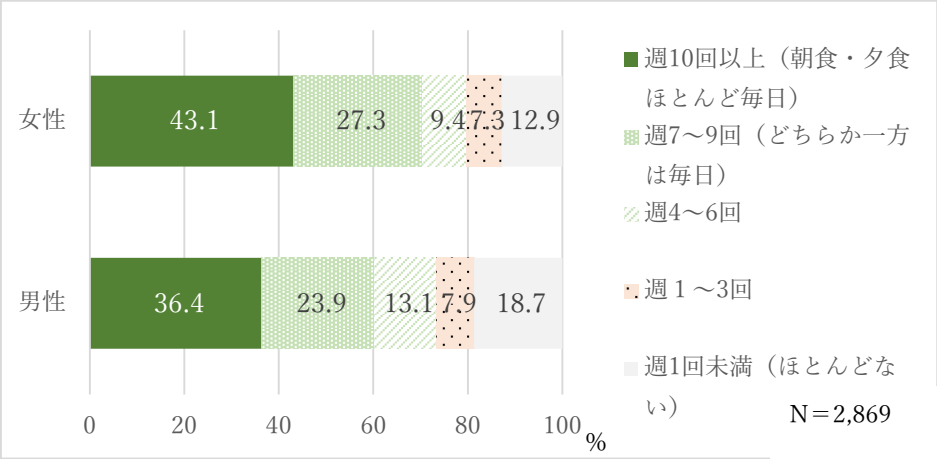
年代別にみると、「週 1 回未満(ほとんどない)」と回答した者の割合は 20 歳代で最も高く、70 歳以上においても比較的高い割合を示した。

図 17－2　家族との食事×年代別



性別にみると、男性の方が家族との食事の回数は少なかった。

図 17－3　家族との食事×性別



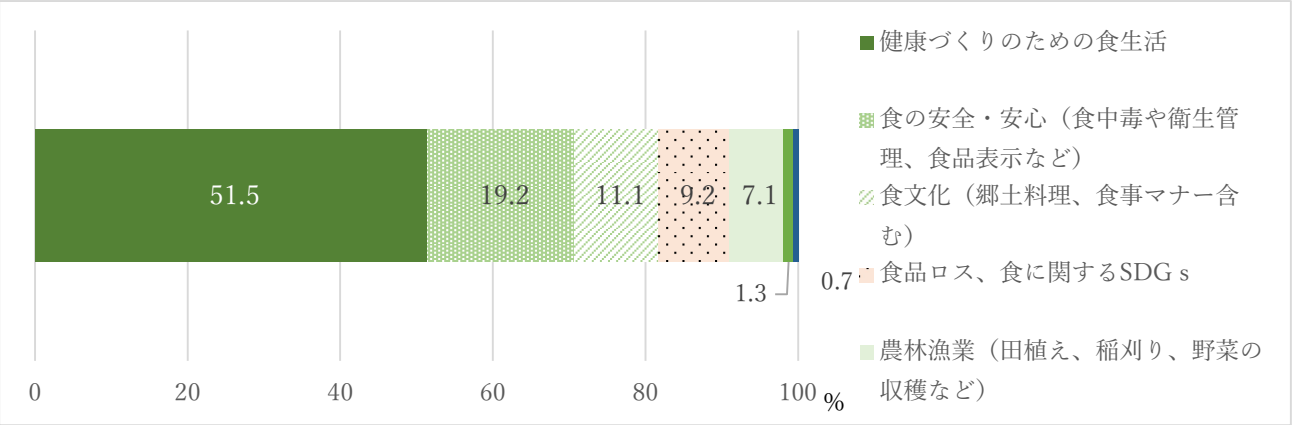
【本市の現状と特徴】

家族と一緒に朝食や夕食を食べることが、週 10 回以上（朝食も夕食も、ほとんどが毎日）と答えた割合は 41.4％であった。年代別にみると、「週１回未満（ほとんどない）」と回答した者の割合は 20 歳代で最も高く、70 歳以上においても比較的高い割合を示した。また、男性の方が女性よりも、家族との食事の回数は少ないと答える割合が高かった。

問18　あなたは、どのような食育内容に興味がありますか。

興味のある食育内容については、「健康づくりのための食生活」（51.5％）が最も多く、次いで「食の安全・安心」（19.2％）、「食文化」（11.1％）、「食品ロスや食に関する SDGs」（9.2％）、「農林漁業」（7.1％）の順であった。

図 18－1　興味ある食育内容



「その他」の自由記述では以下の意見がみられた。

1. 手軽に実践できる食事作りや栄養管理への関心
   仕事と育児に追われる日々で実践できるもの、簡単に作れる献立のアドバイス、きちんと食べてダイエットできる食事など
2. 子どもの食育への関心
   スポーツをする子どものご飯や栄養管理、偏食の克服、好き嫌いをなくす食べ方や学童保育における子どもの食育など
3. 食の安全・食品選択への関心
   添加物の少ない食品の選び方や成分表示の見方、オーガニック・有機栽培・無農薬栽培や正しい食情報など
4. 郷土料理・食文化への関心
   郷土料理（大根寿司など）の学びやスローフード、地元産品など
5. 農業・食料問題への関心
   農家への感謝や農業自給率、食料安全保障やサプライチェーンなど
6. 食を楽しむことへの関心
   楽しく美味しく食べたい、生きる喜び、あまり神経質にならず好きなものを食べるなど
7. 関心なし・その他
   興味がない、行政は何もしないでほしいといった回答も一部みられた。

年代別および同居する子どもの年齢別に比較したところ、いずれの区分においても特徴的な違いはみられず、概ね同様の傾向を示した。

図 18－2　興味ある食育内容×年代別

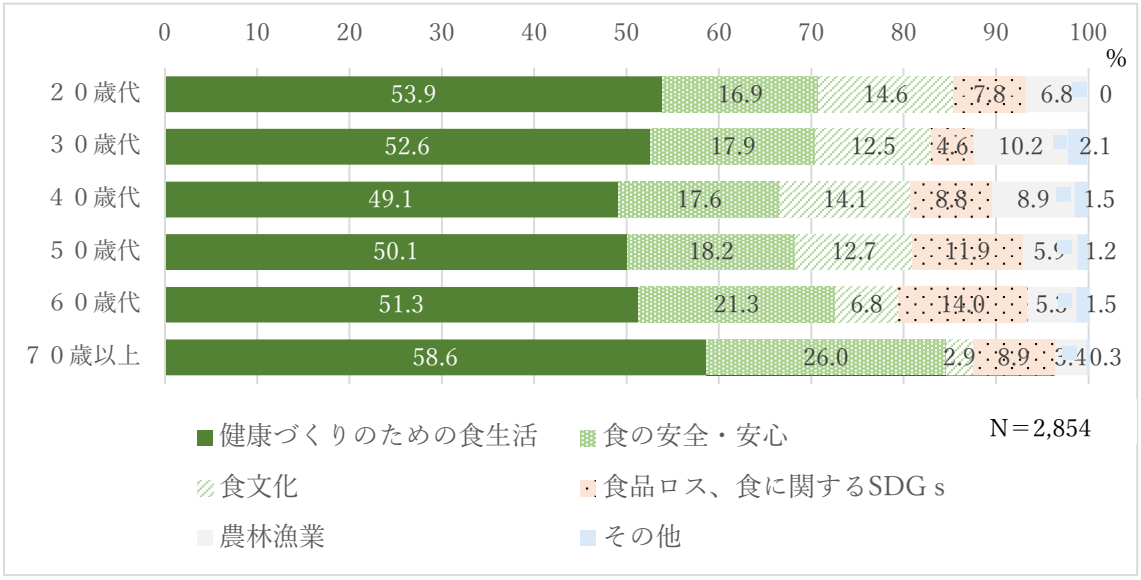
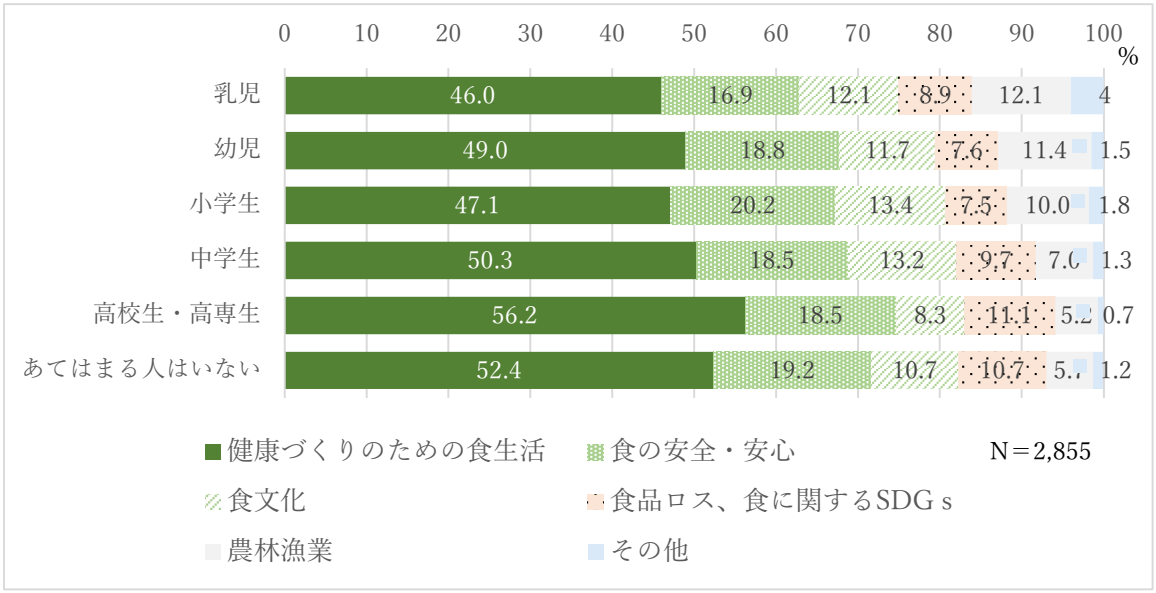


図 18－3　興味ある食育内容×同居の子ども別



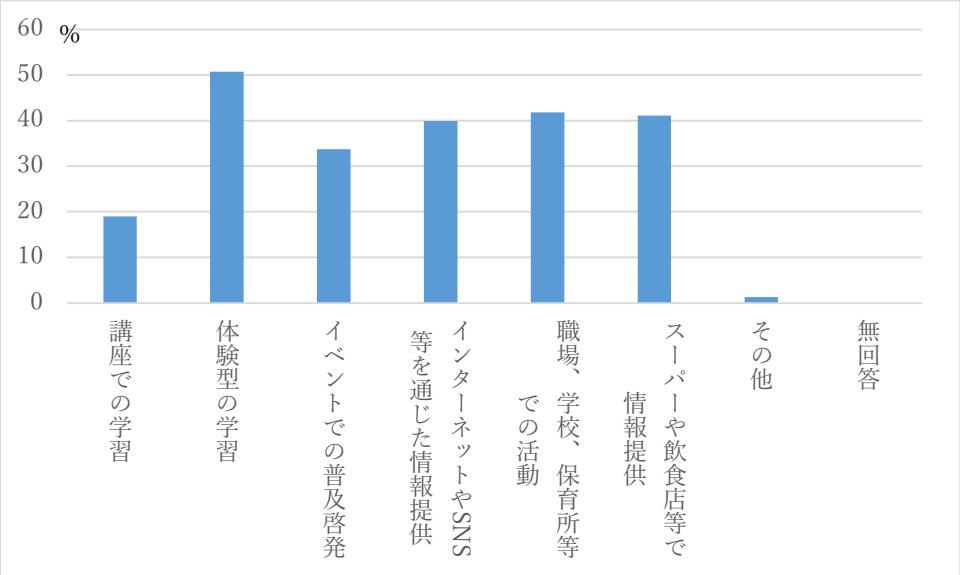
【本市の現状と特徴】

興味のある食育内容については、「健康づくりのための食生活」が最も多く、次いで「食の安全・安心」、「食文化」、「食品ロスや食に関する SDGs」、「農林漁業」の順であった。自由記述では、忙しい生活の中でも実践しやすい食事づくりや子どもの食育への関心が多くみられたほか、食品添加物や成分表示、有機栽培など食の安全に関する内容、郷土料理、農業、食料安全保障に関する意見も寄せられた。一方で、「楽しくおいしく食べること」を重視する意見や、食育への関心が低いとする回答もみられたことから、市民の食に対する関心や価値観は多様であり、今後の食育推進に当たっては、多様なニーズを踏まえた取り組みが求められる。

問19　今後、どのような取組が必要ですか。あてはまるものをすべて選んでください。

今後必要な取り組みとしては、体験型の学習（50.7％）、職場、学校、保育所等での活動（41.8％）、スーパーや飲食店等で情報提供（41.1％）、インターネットや SNS 等を通じた情報提供（39.9％）、イベントでの普及啓発（33.7％）の順となっていた。

図 19－1　今後必要な取り組み

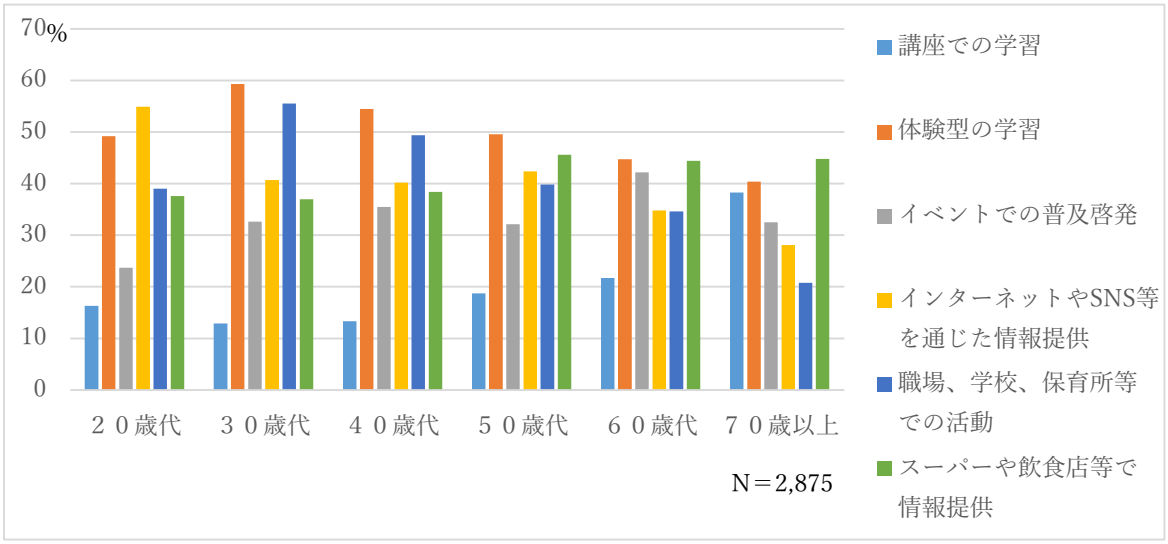


「その他」の自由記述では、以下の意見がみられた。

1. 情報提供・普及啓発の充実
   市ホームページやスマートフォン向けページ、アプリなどを活用した情報発信や、スーパーやコンビニ等での情報提供。チラシやテレビ等による分かりやすく適切な情報提供など
2. 家庭・地域・学校における食育の推進
   家庭内での取り組みや、食育推進大会の開催、学校給食の試食会の開催など
3. 関係機関の連携
   栄養士、保健師、調理師、医療・介護・教育関係者など、多職種が連携した食育の推進や医師や医療機関による指導の充実。健康的な食品購入への経済的支援など
4. 食育施策への慎重・否定的意見
   行政による食生活への介入や啓発への否定的な意見も一部みられた。

年代別にみると、60 歳代までは体験型の学習を求める割合が最も多く、70 歳以上はスーパーや飲食店等での情報提供が多くなっていた。一方、20 歳代は「インターネットや SNS 等を通じた情報提供」が最も多く求められていた。

図 19－2　今後必要な取り組み×年代別



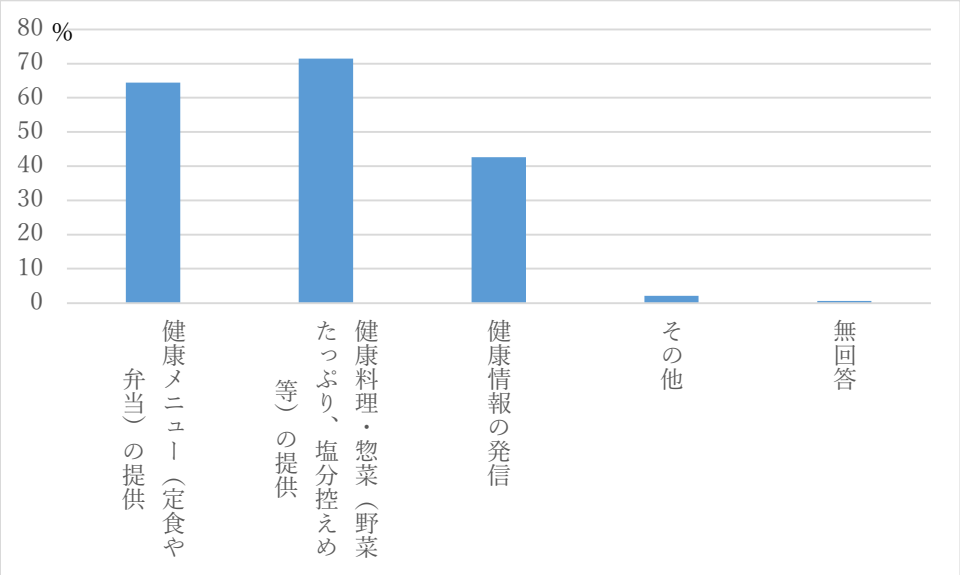
今後必要な取り組みとしては、「体験型の学習」が最も多く求められていた。年代別にみると、60 歳代までは体験型学習を希望する割合が高く、20 歳代はインターネットや SNS 等を通じた情報提供を求める割合も高かった。70 歳以上ではスーパーや飲食店等における情報提供を求める割合が高かった。

これらの結果から、体験型学習に対するニーズが高いことがうかがえたほか、自由記述欄記載の意見からも市民の食に対する関心や価値観、求める支援内容は多様であることが明らかとなった。今後は、体験型学習の機会の充実を図るとともに、多様なニーズに応じた食育施策を推進していくことが重要である。

問 20　健康づくりのための食環境（スーパー、コンビニ、飲食店、職場の食堂等）として必要な内容をすべて選んでください。

健康づくりのための食環境として必要な内容を聞いたところ、健康料理・惣菜の提供（71.5%）、健康メニューの提供（64.4%）、健康情報の発信（42.6%）の順に求める割合が高かった。

図 20－1　健康づくりのための食環境として必要な内容

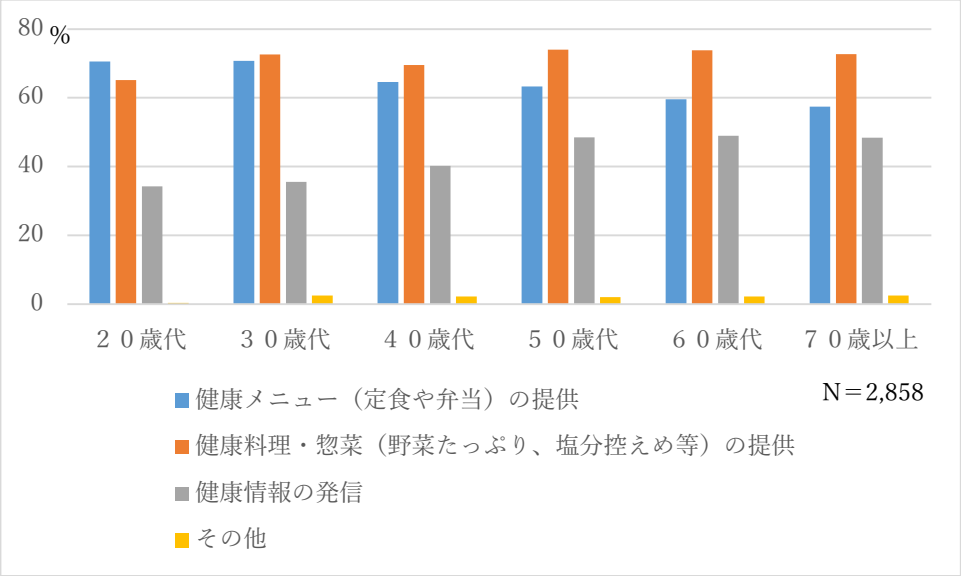


「その他」の自由記述では、以下の意見がみられた。

1. 健康的な食の提供・入手しやすさへの要望
   野菜やたんぱく質を手軽に購入できる環境づくり、健康メニューや健康惣菜の提供、幼児食・離乳食向け商品の提供など
2. 食育・情報提供の充実
   季節の野菜や産地、栽培環境の紹介、旬のレシピや調理方法の紹介など
3. 健康づくりや食品添加物・農薬等への関心
   心身共に健康になる取り組みや、添加物や農薬に関しての正しい知識や情報提供など
4. 学校・子どもへの取り組み
   学校での食育の充実、給食の充実、給食廃棄の削減、子ども食堂の充実など
5. 行政への批判的・慎重な意見
   行政による介入に否定的な意見も一部みられた。

なお、年代によって回答傾向に若干の差がみられた。若い世代では健康メニューの提供に対するニーズが高かった。

図 20－2　健康づくりのための食環境として必要な内容×年代別



【本市の現状と特徴】

健康情報の発信（42.6%）に比べ、健康メニューの提供（64.4%）や健康料理・惣菜の提供（71.5%）を求める割合が高く、市民は情報提供よりも実践しやすい食環境の整備を求める傾向がみられた。年代別にみると、若い世代では健康メニューの提供に対するニーズが高かった。

自由記述では、健康的な食品や惣菜を購入しやすい環境整備や、野菜及びたんぱく質の摂取を促進する取り組みを求める意見が多くみられた。また、食材の栄養価や産地、調理方法等に関する情報提供のほか、学校給食や農業体験を通じた食育の充実を求める意見も寄せられた。さらに、食品添加物や農薬等の安全性に関する関心も高く、正確な情報提供を求める声がみられた。

これらの結果から、市民は健康に関する知識の提供に加え、健康的な食事を無理なく選択・実践できる環境づくりを求めていることがうかがえた。今後は、実践しやすい食環境の整備や健康的な食事を選択できる環境づくりを進めるとともに、多様な価値観やニーズに配慮した食育施策を推進していくことが重要である。

Ⅳ　参考;国の現状値と目標値

	目標（具体的な目標）	国の現状値（令和7年度）	目標値（令和7年度）
①	食育に関心を持っている国民の割合	79.1%	90%以上
②	朝食または夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数	週8.6回	週11回以上
③	地域等で共食したいと思う人が共食する割合	70.1%	75%以上
⑤	朝食を欠食する若い世代の割合	28.2%	15%以下
⑨	主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を１日２回以上ほぼ毎日食べている国民の割合	36.1%	50%以上
⑩	主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を１日２回以上ほぼ毎日食べている若い世代の割合	23.8%	40%以上
⑭	生活習慣病の予防や改善のために、ふだんから適正体重の維持や減塩等に気をつけた食生活を実践する国民の割合	63.2%	75%以上
⑮	ゆっくりよく噛んで食べる国民の割合	46.2%	55%以上
⑰	農林漁業体験を経験した国民（世帯）の割合	57.1%	70%以上
⑱	産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選ぶ国民の割合	66.0%	80%以上
⑲	環境に配慮した農林水産物・食品を選ぶ国民の割合	57.1%	75%以上
㉑	地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えている国民の割合	48.8%	55%以上
㉒	郷土料理や伝統料理を月1回以上食べている国民の割合	54.7%	50%以上
㉓	食品の安全性について基礎的な知識を持ち、自ら判断する国民の割合	74.6%	80%以上

注2 国の現状値と目標値については、令和7年度食育白書の「第3部」（pp.175～176）参照